創立30周年記念誌

東京うつくしま福島浜通り会

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年記念誌

目　　次

題　字　　新妻　剛

創立30周年記念誌発刊に際して……会長　新妻　剛……8
東京うつくしま福島浜通り会創立30周年を祝して……福島県知事　内堀　雅雄……9
『憧れの太平洋』……東京福島県人会　会長　安齋　隆……10
故郷を想う心 変わらず……幹事長　鈴木　正規……11
祝　辞……いわき市　市長　清水　敏男……12
創立30周年記念誌発行を祝して……相馬市　市長　立谷　秀清……13
～復旧と復興、そして発展に向けて～……南相馬市　市長　門馬　和夫……14
ふる里復興・創生「飛翔の年」……広野町　町長　遠藤　智……15
祝　辞……楢葉町　町長　松本　幸英……16
東日本大震災から9年、郷土復興に向けて……富岡町　町長　宮本　皓一……17
創立30周年に寄せて……川内村　村長　遠藤　雄幸……18
会員の皆さまへ……大熊町　町長　吉田　淳……19
双葉町への帰還を目指して新たなまちづくりを……双葉町　町長　伊澤　史朗……20
創立30周年記念誌に寄せて……浪江町　町長　吉田　数博……21
復興に向け、地域の誇りを呼び起こす！……葛尾村　村長　篠木　弘……22
東京うつくしま福島浜通り会「創立30周年記念誌」発刊によせて
……新地町　町長　大堀　武……23
「成長社会」から「成熟社会」へ……飯舘村　村長　菅野　典雄……24
お祝いの言葉……顧問・衆議院議員　小熊　慎司……25
浜通りと共に……顧問・衆議院議員　金子　恵美……26
祝　辞……顧問・衆議院議員　亀岡　偉民……27
東京うつくしま福島浜通り会創立30周年を祝う！……顧問・衆議院議員　末松　義規……28
記念誌発刊に寄せて……顧問・衆議院議員　吉野　正芳……29
創立30周年にあたって浜通りへの思い……顧問・参議院議員　岩渕　友……30
30周年記念誌発行に寄せて……顧問・参議院議員　佐藤　正久……31
希望を運ぶ常磐線とともに浜通りの復興へ全力……顧問・参議院議員　新妻　秀規……32
創立30周年記念誌発行に寄せて……顧問・参議院議員　増子　輝彦……33
東京うつくしま福島浜通り会創立30周年によせて……顧問・参議院議員　森　まさこ……34
祝　辞……顧問・参議院議員　若松かねしげ……35
祝　辞……顧問・前衆議院議員　松木けんこう……36
浜通りに復興の灯を……顧問・福島県議会議員　真山　祐一……37
「創立30周年記念誌」への寄稿……顧問・元衆議院議員　田中　慶秋……38
思い出……顧問・元参議院議員　岩城　光英……39
浪江町の思いで2題……相談役　荒　義尚……40
父霧島昇との思い出……相談役　坂本　紀男……41
創立30周年を迎えて会への想い……相談役　井戸川　妙……42
報徳仕法……相談役　田尻　義雄……44
民謡は心のふるさと　歌い続けて60年……相談役　原田　直之……45
コロナウイルスとリモートワーク……相談役　箭内　克寿……46

福島県浜通り駅伝大会……筆頭副会長　大清水善信……47
ふるさと浜通りをみつめ続ける私……副会長　志村　康子……47
来年は桜に会いに行きましょう……副会長　髙橋　恒子……48
郷里への想い……副会長　西本　貴子……48
汽車……幹事長代理　泉川　安雄……49
創立30周年記念誌に寄せて……副幹事長　竹内久美子……49
避難！・・・その後……副幹事長　半谷　一芳……50
東京うつくしま福島浜通り会に入会して……会計　齋藤　隆子……51
東京うつくしま福島浜通り会と共に歩んで……監事　菅野はつえ……51
待ちわびて！……幹事　黒田恵美子……52
旅をしませんか？……幹事　井川憲太郎……52
東日本大震災を振り返って……特別幹事　いわき支部長　新妻　　司……53
故郷の今に思う特別……特別幹事　楢葉支部長　松本　公一……54
浜通りと私のふれあい……さ　く　ら……55
福島県浜通り地方　復興・再生へ……56
復興・再生のあゆみ……57～64
福島県浜通り地方市町村一覧……65
いわき市……66～67
相馬市……68～69
南相馬市……70～71
広野町……72～73
楢葉町……74～75
富岡町……76～77
川内村……78～79
大熊町……80～81
双葉町……82～83
浪江町……84～85
葛尾村……86～87
新地町……88～89
飯舘村……90～91
東京うつくしま浜通り会の軌跡……93～101
写真で見る、この10年間のあゆみ……102～112
歴代会長……113
役員変遷表（顧問・相談役）……114～117
役員変遷表（役員）……118～121
役員名簿（令和2年度～令和4年度）……122～123
会員名簿……124～125
東京うつくしま福島浜通り会会則……126～129
東京うつくしま福島浜通り会への入会ご案内……130
入会申込書……131
東京うつくしま福島浜通り会創立30周年記念事業実行委員会会則……132～135
東京うつくしま福島浜通り会創立30周年記念事業実行委員会役員名簿……136
創立30周年記念事業協賛金・協賛広告芳名録……137
広告……138～158
表紙作品　作家プロフィール……159
編集後記……160

創立30周年記念誌発刊に際して

東京うつくしま福島浜通り会　会長

新妻　剛

本会は、創立以来発展を続けて、30周年という大きな節目を迎える事ができ、ここに創立30周年記念式典を挙行し記念誌の発刊ができますことは、誠に喜びに耐えません。

この栄えある30周年の歴史と伝統の奥には、会員の方々の営々としてこられたご奮闘と、創立以来変わらぬご厚情とご支援を頂いている関係者の「ご協力」、「熱意」、「情熱」そして傾けて頂いた先人達の素晴らしさに労苦を感じます。

さて、本会は、昭和63年に東京福島県人会の浜通り出身者により「東京福島県人会浜通り会」として産声をあげました。その後、平成25年に『東京うつくしま福島浜通り会』と改称し、草創期の昭和から令和の時代にわたり幾多の変革を重ねながら充実した発展を遂げて参りました。

現在、「会員相互の親睦」と「ふるさとの発展に寄与する」ことを理念とし、会報「うつくしま浜通り」の発行、首都圏ふるさと会との交流、ふるさと訪問旅行等を行っております。さらに、平成23年の東日本大震災以降は、福島復興支援の旗を掲げ、福島の農水産物・観光文化の首都圏への発信等の活動を通じて首都圏在住県人のふるさと「福島」の誇りの共有に努め現在に至っております。

県人会の良いところは、出身地域や性別・年齢・社会や地域社会における地位や肩書等に関係なく、福島県人というだけで、素晴らしいコミュニケーションが図られることです。豊かな人生は、人と人との出会いから生まれます。

創立以来、ふるさと福島と共に歩む会を目指し、伝統を作りだしてきた本会です。30周年という新たな出発に際し、10年後、20年後の周年へ向けて、諸先輩方々が培ったこれまでのよき伝統を継承しつつ、さらに知恵と創意を加えることで、新しい時代にあった特色のある本会作りに会員一丸となり邁進し、更なる発展に向け努めてまいりますので、今後とも皆様の一層のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、この記念誌の編纂にあたり、ご祝辞や玉稿を賜りました皆様並びに創立30周年記念事業実行委員会記念誌部会の方々に厚く御礼申し上げましてご挨拶といたします。

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年を祝して

福島県知事　**内堀雅雄**

東京うつくしま福島浜通り会の皆様には、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

貴会が、昭和63年の創立以来、会員相互の絆を深めながら着実に発展を遂げられ、このたび30周年を迎えられましたことは誠に喜ばしい限りであり、新妻会長をはじめ、歴代役員の方々並びに会員の皆様の熱意と御尽力に深く敬意を表します。

また、皆様には日頃それぞれの分野において御活躍され、福島県の名を大いに高められており、加えて震災以降は、ロータリークラブと連携した被災地の高校卒業予定者の雇用支援、県産品物産展の開催、各地の避難者慰問など様々な活動を通して、福島県の復興に多大なる御尽力を賜り、改めて厚く御礼を申し上げます。

震災から９年が経過する中、国内外からの温かい御支援と県民の皆様の懸命な御努力により、インフラの復旧や新たな拠点施設の整備進展、県内観光地のにぎわい回復、県産品の国内外での高い評価など、これまでの取組の成果が一つ一つ形となって現れてきております。

今年３月には、これまで全町避難が続いていた双葉町で「帰還困難地域」としては初めて避難指示が一部解除されたことをはじめ、大熊町ではJR大野駅周辺の地域で、富岡町では夜の森の桜並木を含む地域で避難指示が解除されたほか、JR常磐線が全線で開通となるなど、浜通りの復興再生に向けて大きく動きだしております。

一方で、避難地域の復興・再生、廃炉・汚染水対策、風評と風化、急激に進む人口減少、さらには、昨年の東日本台風災害からの復旧など、福島県は二重、三重の困難を抱えております。

県といたしましては、今後とも、県民の皆様、そして県人会を始め、本県に思いを寄せてくださる全ての方々との「共働」の輪を広げ、福島の総力を結集し、将来世代に誇りを持って引き継ぐことのできる「新生ふくしま」の創造に向けて、直面する課題の一つ一つに挑戦を続けてまいりますので、皆様には、一層の御支援、御協力をお願いいたします。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会の限りない発展と、会員の皆様のますますの御健勝・御活躍を心からお祈りいたしまして、お祝いの言葉といたします。

『憧れの太平洋』

東京福島県人会　会長

安齋　　隆

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年おめでとうございます。浜通りといえば、新鮮な魚であり、果てしないでっかい夢を与えてくれる大海原太平洋です。

「福島県へ進出した時には驚きました」と始めたのは、イトーヨーカドーの創業者である伊藤雅俊さんが、私と初めて面会した時のことです。「お客さんの多くが店頭に並べた新鮮な海の魚を、どのようにして食べたらよいのかと思案している様子でした。聞けば刺身包丁を持っている家庭は、ほとんどないことも分かりました」という。無理もない。福島県はとにかく広大である。同じ県内といっても、会津地方と中通り地方は海からはるか遠く離れている。私が故郷、二本松を後にした61年前までは、新鮮な海の魚など自宅で食する機会は全くなかった。精々塩サケか乾燥させたニシン、白身魚の練り物位しか届かなかった。トラックの荷台に氷と一緒に沢山のサンマを載せて売りに来てくれた時の感動は今も忘れない。

私が海を初めて見たのは、小学校の修学旅行で松島へ行ったときだ。しかし小さい島々がたくさんあるので、海の大きさはあまり感じなかった。間もなくして海水浴で四ツ倉へ行って、どこまでも広がるでっかい海を見、あの向こうにはアメリカがあるのだと想像をめぐらした時、自分の夢も果てしなく広がっていったのを覚えている。当時灰田勝彦という歌手がウクレレを奏でながら歌う『憧れのハワイ航路』がラジオから流れてくると、少年の夢は無性に掻き立てられた。

長じて千葉からも高知からも宮崎からも、そしてフィリピンやカナダ、米国からも太平洋を望む機会があったが、四ツ倉の海岸で味わった少年の日の感動が戻って来ることはなかった。

そして創業した銀行経営が漸く軌道に乗ろうとしていた時、Ｊヴィレッジ監査役就任の依頼が舞い込んできた。日本サッカー協会の役員からであった。サッカーに全く疎い私に何故という気持ちはあったが、二つ返事で快諾したのは、「故郷に恩返しをするチャンスですね」という上手な誘いに加え、何を隠そう、あの少年の日の『憧れの太平洋』を望める場所に行く機会ができると思ったからだ。

早速出席した株主総会でそれは実現した。そして2011年1月私が属していたセブン＆アイグループのサッカー同好者総勢130名でサッカー大会を開催した。みんなが本物の日本サッカーの練習の聖地でプレイできたことを喜んだ。そして「来年もここでやろう」と約束して解散した。

歴史は無情である。何とその2か月後、東日本大震災と福島第一原発事故が起こってしまった。そして漸く昨年4月、Ｊヴィレッジは全面復興された。祝典に出席された高円宮妃殿下から「安齋さんの作った駅はあそこですよ」と笑顔で声を掛けられ、妃殿下との2ショットは私の宝物となった。Ｊヴィレッジを復興の象徴とするためには「憧れの太平洋」を望めるＪヴィレッジに駅が欲しいと、JR東日本にしつこくお願いしてきた努力が呼んだ幸運である。東京福島県人会の今年の母県訪問は、このＪヴィレッジと福島第一原発となった。今の子供たちにも「憧れの太平洋」にすることを誓いたいと思う。

故郷を想う心 変わらず

東京うつくしま福島浜通り会　幹事長
創立30周年記念事業実行委員長　**鈴 木 正 規**

創立30周年の節目に当たり、記念事業実行委員長よりご挨拶申し上げます。

昨年11月に「創立30周年記念式典」が、会員の皆様のご支援のもと、滞りなく挙行できましたことを、ここにご報告いたします。ありがとうございました。

また、今回お忙しい中、皆様からご寄稿いただき、このような立派な記念誌を発刊することができましたこと、心より御礼申し上げます。

今後とも、当会の運営に対し変わらぬご指導・ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

前後いたしましたが、自己紹介をさせていただきます。私は浪江町出身の鈴木です。

東京電力福島第一原子力発電所から海岸線を北に約7 km、請戸川を挟んで請戸港の対岸、マリンパーク付近の集落が私の故郷です。子どもの頃や青春時代の想い出に会いたくなったら「いつでも帰ればいいや」と思っていた長閑な故郷は、あの日、15.5 mに達したとされる大津波に襲われ、実家は流失し景色は一変、同級生や先輩をも連れ去ってしまいました。

この会に招かれたのは5年前の“福島県人会定期総会”会場でした。その後、何もわからずに本会役員会に参加、優しい諸先輩方々からご指導をいただき、平成30年に幹事長を拝命しました。その後、会員の皆様方からも事あるごとにお声がけいただき、そのことが会における私の自信と勇気になっています。

さて、東日本大震災から9年が経ち故郷は少しずつではありますが復興に向かっています。

3月14日に、震災と原発事故以降不通だったJR常磐線富岡駅から浪江駅の区間が開通しました。痛めた大きな傷のうちの一つが、やっと癒えた感じがするのは私だけでしょうか。

昔、常磐線は不思議な“ふるさと感”を与えてくれる乗り物でした。乗っている人の方言を聴いて故郷を感じるということではありません。高校生の頃、原町駅（余談ですが、本誌発刊の頃のNHK朝ドラは「エール」ですね。私の母校の原町高校校歌作曲者は古関裕而先生、さらに出身の幾世橋（キヨハシ）小学校校歌も同氏作曲です）から浪江駅に電車が着くと「家に帰ってきた」と感じ、上京後は上野駅から途中の「いわき駅」に電車が着くと「家に帰ってきた」と感じたものです。あの頃から“浜通りが自分の故郷”という価値観になっていました。

阿武隈山地と太平洋の豊かな産物と温暖な気候に恵まれた我々の故郷が、必ずや活気を取り戻すことを信じ「故郷を想う心　変わらず」のもと、この後も会の活動を行ってまいります。

今後とも本会に対しご理解とご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

祝　辞

いわき市 市長　清 水 敏 男

東京うつくしま福島浜通り会が、このたび創立30周年の大きな節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

会員の皆様におかれましては、長きにわたり同郷出身者相互の親睦を深めながら、ふるさと福島県浜通り地方の復興と創生に寄与するため、様々なボランティアや募金活動等に取り組んでいただいておりますことに、深く感謝と敬意を表します。

さて、本年3月11日で東日本大震災から丸9年が経過いたしました。当市におきましては、これまで、皆様をはじめ国内外の多くの方々から御支援いただき、復旧・復興の歩みを着実に進めて参りました。平成30年には、津波被災地域における「震災復興土地区画整理事業」が完了し、被災された皆様の生活再建の基盤が整うとともに、甚大な被害が生じた重要港湾小名浜港につきましても、港湾機能が回復したことに加え、背後地には津波避難ビルとしての機能を併せ持つ、福島県内初のイオンモールが開業するなど、震災前にも増して、魅力と賑わい溢れるまちへと生まれ変わりつつあります。

また、本年5月には、当市の震災メモリアル事業の中核拠点施設として、平薄磯地区に整備した「いわき震災伝承みらい館」が供用を開始したところであり、震災の記憶と教訓を確実に後世へと伝え、今後の防災対策にしっかりと生かしてまいりたいと考えております。さらには、原子力発電所事故の影響が色濃く残るなか、汚染水対策も含めた廃炉の取組みや適正な損害賠償が実施されるよう国及び東京電力に対し、引き続き申し入れていくほか、農林水産業や観光業の回復に向けた風評の払拭、津波被災地域におけるコミュニティの再生などに全力で取り組み、復興の総仕上げを実現してまいります。

このような中、昨年10月、当市は令和元年東日本台風とその後の大雨に伴い、市内各所で河川堤防の決壊や越水等が発生し、尊い人命が失われるとともに、多数の住家被害が生じるなど甚大な被害に見舞われました。

震災からの復興・創生に取り組む途上で、当市は再び大規模な災害に見舞われることとなりましたが、将来にわたって災害に強い安全・安心なふるさと・いわきの礎を築くとともに、市民の皆様が「住みやすい・住み続けたい」と思えるまちとなるよう、引き続き私自身が先頭に立ち、これまで以上に情熱と気概を持って、全身全霊をかけて市政運営に取り組んでまいります。

これらの取組みを着実に推進していくためには、いわき市民の皆様のみならず、遠くふるさとを離れ、各界で幅広く御活躍されております方々の御支援や御協力が必要不可欠であると考えておりますので、会員の皆様におかれましては、当市の市政運営に対しまして、今後とも御理解と格別のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会の益々の発展と、会員の皆様の御健勝、御多幸を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

創立30周年記念誌発行を祝して

相馬市 市長　立谷秀清

東京うつくしま福島浜通り会30周年、誠におめでとうございます。

東京うつくしま福島浜通り会におかれましては、平成元年の創立から今日までの間、それぞれのお立場から故郷の発展のためにご尽力をいただいております。特に、本市にも甚大な被害を及ぼした東日本大震災からの復興に対し、心温まるご支援をいただいております。現会長の新妻剛様をはじめ会員各位のご活動に敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

さて、あの東日本大震災から9年が経過しました。この間、貴会をはじめ国内外からのあたたかいご支援をいただきながら、市民一丸となって復興の歩みを進めてまいりました。おかげさまで本市の復興事業は概ね計画どおりに進捗しております。

昨年12月、復興支援道路として整備が進められていた、東北中央自動車道（相馬福島道路）の相馬インターチェンジから相馬山上インターチェンジまでの区間が開通しました。これにより相馬市内の区間全てが開通し、例えば相馬市役所から福島駅までは約50分で到着するなど、アクセスが大変よくなりました。また、今年3月にはJR常磐線が全線で運転再開し、品川から仙台を結ぶ特急スーパーひたちも運行されておりますので、本市復興の姿をご覧にお越しいただければ幸いです。

また、復興創生期間の最終年となる令和2年でハード整備は概ね完了します。そのうち、新たにオープンする施設をこの場をお借りしてご紹介します。

1つめは、既に4月にオープンしたスポーツアリーナそうま第二体育館です。子ども達をはじめ市民の健康増進はもとより、これまでに整備したパークゴルフ場、サッカー場、ソフトボール場とともに、スポーツ観光の拠点として活用し、交流人口の拡大を図ってまいります。

2つめは、津波により住家が流失し災害危険区域に指定された尾浜地区に、子どもたちが集い、世代間交流の場となる「尾浜こども公園」です。約68,000㎡の敷地に、芝生広場、大型遊具、地域交流支援施設などを配しており、小さなお子さま連れのご家族からお年寄りまで、多くの方にご利用いただきたいと思います。

3つめは、農水産物の風評被害の払しょくと、観光復興を目的とした「復興市民市場」です。この市場では、相馬地方の地場産品やおみやげの販売、飲食コーナーなどを備え、相馬の取れたてのおいしい魚や農産物の販売・食事、イベントの開催により、皆さんに食の安全・安心をPRしていきます。

引き続き、復興の歩みを進めるとともに、市民の健康管理や教育・子育て環境の充実など、「相馬市が相馬市であり続ける」ために、魅力あふれる相馬市づくりを進めてまいります。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会の皆様におかれましては、今後ともふるさと相馬へのご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、貴会の益々のご発展と会員各位のご健勝を心よりお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

～復旧と復興、そして発展に向けて～

南相馬市 市長 門馬和夫

東京うつくしま福島浜通り会が、このたび創立30周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。貴会員の皆様方におかれましては、平素より郷土の発展のため、それぞれのお立場からご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故に際しましては、物心両面において、貴会より多大なるご支援を賜り誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。

さて、東日本大震災及び原発事故から9年の月日が経ちました。

この間、当市では、市民が一日でも早く安心して生活の再建ができるよう、震災からの復旧・復興を進めてまいりました。現在、当市の一部に出されていた避難指示のほとんどが解除され、令和2年2月には、この地域で約4,200人が移住や避難先から帰還し、地域の復興に向け奮戦しております。

しかしながら、今もなお続く風評被害をはじめ震災による爪痕は、当市に住む方々の生活や経済活動に多大な影響を与えております。また、令和元年東日本台風やその後の大雨による甚大な被害は、自然災害の脅威を改めて認識させられるものでありました。

当市では、このような大災害を乗り越え、ここ南相馬で生活の営みを続けられるまちを創るため、「復興総合計画」のもと復旧・復興に向けた様々な施策に取り組んでおります。昨年は、常磐自動車道において市内に3か所目となるインターチェンジ・（仮称）小高スマートインターチェンジの整備が決定されました。このことによって、市内へのアクセスの向上が期待されており、更なる地域発展の足掛かりになることでしょう。また、震災後9年ぶりに市内海水浴場の海開きを行いました。魅力あふれる南相馬の海辺に賑わいが戻り、市民とその喜びを分かち合うことができました。

本年春には、JR常磐線の全線運転開始と併せ、東京－仙台間の特急列車の直通運行が再開されました。本線は常磐自動車道と併せて、浜通り地域と他地域をつなぐ大動脈であり、今後、関係人口拡大や地域経済発展の原動力になるものです。時を同じくして、全面開所を迎えた福島ロボットテストフィールドでは、人とロボットが共生し協働する社会の実現に向け、様々な挑戦がスタートしております。8月には、ロボット技術とその叡智の祭典である「ワールドロボットサミット2020福島大会」の開催を控えており、少し先の未来を感じことができるでしょう。

令和3年には、震災と原発事故から10年の節目を迎えます。これまでにいただいたご支援に対する感謝を表し、これまで以上に復旧・復興を加速させ、未来の子どもたちもこの地で家族や友人と暮らし続けられる「100年のまちづくり」に向け、誠心誠意、取り組んでまいります。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会の皆様方におかれましては、今後とも尚一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、貴会の益々のご発展と会員各位のご健勝を心からお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

ふる里復興・創生「飛翔の年」

広野町 町長 遠藤　智

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年並びに記念誌の発行にあたり心からお慶び申し上げます。また、遠くふるさとを離れ在京の地でのご活躍に対し、深く敬意を表しますと共に、日頃より、震災と原発事故からの復興に向け多大なるご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

私は全身全霊をささげ、ふる里復興・再生および広野町民の「幸せな帰町」に取り組んできました。緊急時避難準備区域の解除から本年4月1日で7年半を迎え、9割の町民帰還となり、生活再建を念頭に、被災地から新しい時代の、新たな共生のまちづくりに向けて、全力で取り組んでおります。

これまで、津波被害を受けた駅東側の防潮堤整備、嵩上げした県道広野・小高線、防災緑地の整備、災害公営住宅整備、公設商業施設整備、医療福祉施設の充実、駅東口広場の完成、居住環境の整備などの環境整備を進めてきました。本年は、駅構内のバリアフリー化工事、未来の架け橋へのエレベーター設置設計業務、広野駅東側開発第2期で計画している56区画住宅地整備等による若者世代の移住・定住人口の拡大に取り組み、生活する皆様の命を守り、安心して暮らすことができるまちづくりを進展・展望して参ります。未来を託す子どもたちの健やかな成長を育む幼保連携型認定こども園「ひろぱーく」の開園、ふたば未来学園中学校・高等学校の新校舎が完成し、中央台及び築地地区において文教施設が集中し、教育の丘が形成され、町内いたるところで元気な子どもの姿を目にすることが多くなり復興を実感できるようになりました。

これからの双葉地方の将来を見据え、震災から広野町が果たしてきた役割を踏まえ、町民の生活再建のため、経済的負担を軽減させ生活再建を下支えして参ります。「福祉のまちづくり」宣言を踏まえ、「第二次広野町健康づくり計画」を策定するとともに、「地域連携手帳」を作成し、広野町地域包括ケアシステム構築の確立、在宅医療と介護連携の施策、医療、介護及び保健機関がより円滑な情報共有を図ることが可能となるよう取り組んで参ります。

ふるさと広野町の歴史、伝統、文化に対する誇りを胸に、本年を“ふる里復興・創生「飛翔の年」”と位置付け、これまで取り組んできた町の復興・再生を、新しい広野町の「創生」へと進化させ、新しいまちづくりを進め、生活再建を念頭に安心・安全なまちづくりに向けて着実に前進して参ります。本年は町制施行80周年を迎え、継往開来、先人たちの歩みに敬意を払い、100周年に向けて更なる発展を目指していきますので、今後とも一層の御支援、御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

皆様におかれましては、故郷へお帰りの節は、是非広野町へお立ち寄り下さいますようお願い申し上げます。

終わりに、うつくしま福島浜通り会の益々のご発展と会員各位のご健勝、ご活躍を心よりご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

祝　辞

楢葉町 町長　**松本幸英**

東京うつくしま福島浜通り会が創立30周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

会員相互の親睦とふるさと浜通り地方の発展に寄与されながら、特に東日本大震災以降は、浜通り地方の復旧復興に多大なるご支援とご協力をいただいておりますこと、改めて感謝申し上げます。

避難指示解除以降、当町では、住民の生活環境を整備することを最優先に復興業務を進めてまいりました。昨年度に整備いたしました「笑ふるタウンならは」内の商業施設「ここなら笑店街」と交流館「ならはCANvas」には、これまでになかった新たな賑わいが生まれております。

また、昨年4月には、屋内体育施設「ならはスカイアリーナ」がオープンし、双葉郡復興のシンボルである「Jヴィレッジ」もグランドオープン、さらには「Jヴィレッジ駅」の開業、「道の駅ならは」温泉保養施設の再開など、昨年は復興の進捗が顕著に現れた1年でありました。中でも「ならはスカイアリーナ」は、町民の皆様の健康づくりに活用するとともに、Jヴィレッジ等と連携し、「スポーツのまち楢葉」の再生と振興を目指すうえで重要な役割を担っており、町外からも多くの方にご利用いただいています。

このように、町が賑わいを取り戻しつつある中、町内に帰還される方も少しずつ増加し、町内居住者は約4,000人、居住率はこの1年間で約5%の増加を見せ、60%近くまで回復してまいりました。町内外からの移住・定住の受け皿として整備した「笑ふるタウン」内の分譲宅地でも、住宅等の建設が日に日に進んでおります。

さらに、今月にはJR常磐線が全線再開し、Jヴィレッジ駅が常設化されます。これに伴って、Jヴィレッジへの来訪者が増大することが予想され、その近隣である「道の駅ならは」でも6月中旬には物産館が再開を予定しておりますことから、今後の交流人口拡大に大いに期待しているところであります。　今年は、震災から10年目の節目を迎え、復興創生期間の最終年度となりました。そして、楢葉町では避難指示の解除から5年目となりましたが、生活インフラの整備がほぼ完了し、町内には人口の6割近い住民が居住して、賑わいと交流が生まれつつあります。

当町では、「新生ならは」の創造に向け、「魅力的な教育」「営農の再開」、そして「健康増進とスポーツの振興」という3つの重点施策を中心に町政の運営を進めてまいりました。今後も、この3本の柱を中心に、安心安全はもとより、町民が暮らしやすいと感じることができるまちづくりを求め続けてまいりますので、今後も一層のご理解とお力添えをお願い申し上げます。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会が創立30周年を機に、これまでの歴史と実績を礎に更なるご発展を遂げられますことを心からお祈り申し上げます。

東日本大震災から９年、郷土復興に向けて

富岡町 町長　宮 本 皓 一

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年、誠におめでとうございます。

これまでの当町へのご支援とご協力に対し、この場を借りて感謝申し上げます。

東日本大震災並びに東京電力福島第一原子力発電所事故から、９年の歳月が過ぎました。

当町は、９年前のあの日から、厳しい寒さの中を手探りで本町の復興・再生の取り組みを進めてまいりました。この間の数多くのご支援とご協力、そして当町に関係する方々のご努力により、様々な町内活動が再開され、小中学校やこども園では明るく元気な子供たちの声が響き渡るなど、ほんの少しではありますが春の温もりを感じることができる町となってまいりました。さらに、この３月からは常磐線を走る電車を朝夕に見ることができ、何気ない日常に懐かしさと嬉しさを感じております。

この温もりが確かなものとなり、当町を未来につなげ将来を切り拓くことができるよう、令和２年度においても、「新たな産業の集積による雇用の創出」、「未来を担う子供たちを地域全体で育てることの実践」、「全世代型の安心を担保する健康づくりと福祉の充実」、「新たな農業へのチャレンジを含めた農業の再生」、「桜をはじめとする地域資源を活かした交流の促進」を施策の柱として、これまで以上の情熱と真摯さでしっかり手当するとともに、特定復興再生拠点区域の整備を足掛かりとする「帰還困難区域全域の再生」に町民をはじめ国や県、関係機関と一丸となって取り組み、復興再生から創生へと本町の発展を未来志向で目指してまいりたいと考えております。

現在、町を取り巻く状況は、福島復興再生特別措置法等の改正や東京電力福島第二原子力発電所の廃炉決定など大きく変化してまいりました。今回、これらの変化に対応する今後５年間の取り組みや事業進捗を検証する仕組みを整えた「富岡町第二次災害復興計画（後期）」を策定いたしました。

これまで町は、「心の復興」と「ふるさと富岡の復興」を基本理念とする第二次災害復興計画に基づき、取り組んでまいりましたが、今後は、この後期計画に基づき、これまでの取り組みの検証や新たな課題の解決に向けた取組をしっかりと進めてまいります。

今年は、全線再開通となった常磐線の活用もあり、咲き誇る夜の森の桜の姿を多くの方に観ていただく予定でありましたが、新型コロナウイルスの国内感染が急速な勢いで広まった状況を踏まえ、町主催のイベント等の中止または延期の判断をしていく中で、苦渋の判断により「桜まつり２０２０」を中止することといたしました。また、多くの関係者の方々ともに、逞しく咲くふるさとの桜を見る日を楽しみに、「ふるさと富岡」の復旧復興に引き続き勇往邁進してまいりますので、当町をはじめ被災地へのこれまでと変わらぬご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

創立30周年に寄せて

川内村 村長　遠藤雄幸

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年、誠におめでとうございます。

貴会は創立以来、会員相互の親睦と故郷　福島県浜通り地方の発展に寄与することを目的に活動してこられました。特に、2011年3月11日に発生した東日本大震災・原発事故におきましては、被災地への表敬訪問、義援金募金活動、復興に関わる各種イベントへの参加等、福島浜通りの復興に多大の貢献をしてこられました。これまでのご支援に、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

あの震災・原発事故から10年目を迎えました。当村では、これまで生活環境の回復やインフラ整備等様々な施策を実施してきた結果、約8割の方々が戻って村での生活を再開しております。村では現在、急激な人口減少や少子高齢化の問題に加えて、若い世代の帰還が少ないことやコミュニティーの維持が困難な地域も出てきている等、新たな課題も顕在化しており、復興・創生も、次のステージに移ってきています。

今後、持続的に成長をしていくためには、住民帰還のための施策と並行して、新たな風（移住・定住者）を呼び込むための施策を充実させ、単に震災前の状態に戻すのではなく、「創造的・未来志向の復興」を成し遂げていくことが必要であると考えています。そのため、村内のあらゆる資源を活かし、村内外の組織や人との交流を促し、新たな風を呼び込むための施策を進め地域力の回復を図ってまいります。

産業の振興については、工業団地を整備して積極的に企業誘致を図っているところですが、基幹産業である農林業では、新たな内発的産業の動きも出てきており、ワイン用ぶどうや生食用ぶどうの栽培、西洋野菜栽培や花卉、エゴマなどの生産販売の取組みも始まっています。

また、小中一貫の義務教育学校「川内小中学園」が令和3年4月に開校いたします。教育環境の整備は、若い世代に戻ってきてもらう上でも重要な事業であり、川内ならではの教育に力を注いでまいります。

私たちの先人達はこれまで幾多の困難を乗り越え、歴史を積み上げてこられました。そのＤＮＡをしっかり受け継ぎ、「今を乗り越え、その先へ」与えられた試練に果敢に立ち向かってまいります。

村民一人ひとりが希望や生きがいを持ちながら暮らすことのできる村、多くの人々を惹きつけるような、特に、子供、女性、若い人達が住みたいと思うような、そして高齢者にやさしい、魅力的な村づくりを進めてまいります。

今後も、

最後になりますが、貴会が30周年を契機としてますます御発展されることを御祈念申し上げ、御祝いの言葉といたします。

令和2年5月

会員の皆さまへ

大熊町 町長　吉田　淳

このたびは東京うつくしま福島浜通り会様の創立30周年記念誌の発行、誠におめでとうございます。貴会の震災復興に対する深い思いと、数多くの復興支援事業に対し、まずは改めて感謝と敬意の念をお伝えさせていただきます。

当町は東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により8年にわたり全町避難が続きましたが、昨年4月、一部地区で避難指示が解除され、本庁舎を町内に移転しました。さらに今年3月には、放射線量が高く立ち入りを制限されていた帰還困難区域のうち、JR大野駅周辺の避難指示が解除され、常磐線の全線再開によって9年ぶりに列車がホームに停車しました。今後は、2022年春までに、帰還困難区域860ヘクタールの避難指示解除に向け、除染が着実に進められているところです。現在、役場庁舎がある大川原地区は町復興の足掛かりの地として、災害公営住宅や再生賃貸住宅、福祉施設などが立ち並び、今後は交流施設や商業施設も整備されます。

このように着実に復興への道を進んでいるかに見える当町ですが、町を維持する上で欠くことのできない「人」の課題を抱えています。最新の住民意向調査で、6割の方が町に戻らないことを決めたと回答しました。9年の歳月の長さを痛感する結果でした。しかし、私たちは人々の笑顔があふれる町を何としても取り戻したいのです。町を取り巻く町民は、大きく三通りに分かれます。それは「町に戻りたい町民」「町に戻らない町民」そして「新たに仲間となる町民」です。様々な形で町と関わるこれら町民の方を守り、そして町民と共に新しい大熊町が築かれていくような町政を実現したいと願っています。そのために、

・戻りたい人がいる限り、帰還できる場所を着実に広げる
・戻れないと思っている人が、いつか戻りたいと思えるような絆を提供する
・新たに町民となる人に、住み続けてもらえるサービスを提供する

この3点に取り組みたいと考えています。

いろいろな立場で町に関わるこれらの皆さんの融合、協力によって、これからの町は築かれます。「戻ってよかった」「つながりを持ち続けてよかった」「移り住んでよかった」。そう思ってもらえるための努力をしていきます。

私の信念は「愚直に、柔軟に、そして住民を守る」です。もとより人並外れたリーダーシップや豊かなアイデアに恵まれたような人間ではありません。できることを一つずつ確実にやっていくことしかできません。信念を胸に刻みながら、町政運営にあたってまいります。

貴会の皆さまにおかれましては、当町のような自治体が同じ浜通りで再建への努力を続けていることを、心の片隅にとどめていただきたいと願います。私たちが最も恐れるのは、震災・原発事故の風化です。大きな支援は必要ありません。時々思い出していただき、温かい言葉をかけていただくだけで結構です。それが私たちにとっては何にも代えがたい、復興への力となります。

双葉町への帰還を目指して新たなまちづくりを

双葉町 町長 伊澤史朗

双葉町は福島県の浜通りのほぼ中央、双葉郡の北東部に位置し、東に太平洋をのぞみ、「白砂青松」白い砂浜と松林の恵まれた環境で、水質も良いことから環境省の「快水浴場百選」に選定された双葉海水浴場があり、西には緑豊かな阿武隈山系が連なる、海と山に抱かれた豊かな自然を誇る美しい町です。

しかし、平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により９年が過ぎた今もなお、全町避難が継続しております。

そのような中で、本年３月４日に避難指示解除準備区域とJR双葉駅周辺の一部区域の避難指示解除、特定復興再生拠点区域内の立入り規制の緩和を実現することができました。それに合わせ駅に隣接した双葉町コミュニティーセンター内に役場機能の一部を再開しました。

３月７日には整備を進めておりました常磐自動車道「常磐双葉インターチェンジ」が開通し、１４日にはJR常磐線の全線再開と双葉駅が東西自由通路を兼ね揃えた新しい駅舎に生まれ変わりました。東京と仙台を結ぶ特急列車が双葉駅にも１日上下線３本ずつ停車するほか、普通列車は１日各１１本停車いたします。

さらに７月には、福島県が整備を進めているアーカイブ拠点施設「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開業予定であり、隣接して町が整備を進めている産業交流センターについても着々と工事が進んでおり、伝承館、産業交流センター、復興祈念公園の一部が一体的にオープンできるよう、整備を進めております。３つの施設の連携により、震災の記憶を伝承し、復興への思いを伝える発信拠点としても魅力を高め、双葉町に関心をもっていただける関係人口の増大を図ってまいります。

また、双葉駅西側地区については、帰還を目指す町民や、居住を希望される方が集まって生活することができる新たな生活拠点として、整備を進めてまいります。電線地中化の推進や域内資金循環を実現できるまち、次世代モビリティによる移動支援を受けながら自家用車に頼らず、自らの足で楽しく歩くことができる「ウォーカブルタウン」のまちを目指します。それらの実現により、二酸化炭素排出量やエネルギー消費量を削減し、環境にやさしくかつ便利なまちづくり進めてまいります。

このように令和４年春の特定復興再生拠点区域の避難指示と双葉町への町民帰還を目指して鋭意取り組んでおりますので、会員の皆様におかれましても双葉町にぜひ足を運んでいただき、町の復興の状況などをご覧いただければ幸甚に存じます。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会様のこれまでのご支援に感謝するとともに、今後ますますのご発展と会員皆様方のご活躍、ご健勝を心よりお祈り申し上げ、あいさつといたします。

創立30周年記念誌に寄せて

浪江町 町長 **吉田数博**

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年誠におめでとうございます。

ふるさとを離れ在京の地での会員の皆様のご活躍に深く敬意を表しますとともに、当町及び当町町民に対し多大なるご支援いただいておりますことに、この場をお借りして衷心より御礼申し上げます。

さて、早いもので、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故から9年の歳月が流れました。いよいよ10年目の節目を迎えることとなり、懸命に復興に取り組んできたこれまでを振り返りますと、特に昨年度は、蒔いてきた復興の種がようやく芽を出し始めたと感じられる年となりました。

7月に待望のスーパーマーケットがオープンし、町内で生鮮食料品の買い物ができるようになりました。また、10月の水産業共同利用施設（荷捌き場、せり場等）の完成によって、間もなく新鮮で美味しい「請戸もの」が復活することでしょう。そして、3月には世界最大級となる水素製造拠点が棚塩に完成し、そこで製造された水素が2020年東京オリンピックの聖火リレーや聖火台、選手村などで利用されることが決まりました。また、新たな産品として力を入れてきた花卉においても、浪江産のトルコギキョウがメダリストへの花束に利用されることが期待されています。

さらに今年度は、7月に「道の駅なみえ」が一部オープンとなり、複数の誘致企業の操業開始、JR常磐線再開も手伝って町には多くの交流が生まれるものと思います。引き続き、乾燥調整貯蔵施設（カントリーエレベーター）をはじめとした営農再開支援事業や、泉田川ふ化施設の再開準備、漁港施設の充実など農林水産業の再生にも力を入れていく所存です。

一方、未だ町の面積の8割を占める帰還困難区域では、末森、室原、津島の3ヶ所の特定復興再生拠点の除染が始まったものの、特定復興再生拠点以外の地域ついては、未だ国から明確な方針が示されておりません。引き続き、町内全域での避難指示解除に向け具体的な時間軸を含めた方向性を示すよう、国に対して強く要望してまいります。

町は今、急速な人口減少と少子高齢化によって非常に厳しい財政状況にあります。しかし、ふるさとを再生し、より良い浪江町を子供たちへと引き継いでいくために、これまで連綿と培われてきた伝統や文化、地域コミュニティーの復興と、未来のエネルギーである水素を中心とした再生可能エネルギーや福島ロボットテストフィールド等の最先端技術を取込んだ「持続可能なまちづくり」を全力で推し進める所存です。

以上、ふるさと再生に向けた状況を述べさせていただきましたが、浪江町の復興と創建の実現にはまだまだ多くの課題の解決が必要となります。ここに改めて皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

最後になりますが、東京うつくしま福島浜通り会の益々のご発展と、会員の皆様のご多幸、ご活躍をご祈念申し上げ挨拶とさせていただきます。

令和二年四月吉日

復興に向け、地域の誇りを呼び起こす！

葛尾村 村長　篠木　弘

東京うつくしま福島浜通り会の皆様方には、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げますとともに、貴会創立30周年誠におめでとうございます。本村は、帰還困難区域を除く避難指示が解除されてから3年9か月となりました。現在、帰還困難区域である野行行政区の家屋解体と除染が始まっております。

復興の主な状況につきましては、小売店、食堂の村内再開によって買い物環境が整い、歯科診療所・内科診療所の再開、そして、平成30年4月の幼稚園、小中学校の村内再開によって、村の希望である子ども達の声が村内に響くようになったことは、何よりの喜びでした。

また、村民が集う秋の「かつらお感謝祭」の復活など、一つ一つ震災前の村の機能が整うとともに、復興交流館あぜりあのオープン、自転車ロードレース「ツール・ド・かつらお」の開催、さらには、胡蝶蘭栽培施設が稼働を始め、繊維製造業の企業が村に進出し、新たな雇用の場が増えるなど、復興再生が進み、賑わいと明るさも出てまいりました。

このような中、村固有の歴史や伝統文化に再び光を当て、昨年9月に、江戸時代に催されていた葛尾大尽の歴史を約160年ぶりに再現した葛尾大尽屋敷跡薪能が開催されました。能舞台を復活させ、幽玄な夕闇の中で舞われた能狂言は、村民の皆さんに地域の誇りを蘇らせてくれたのではないかと感じております。また、併催した葛尾大尽ゆかりの史跡を巡るバスツアーでも、本村の素晴らしさを広く発信できたものと嬉しく思っております。

村の基幹産業である農林畜産業を始め、産業団地の整備による生業再生など、課題は山積しています。農業については、水稲栽培の拡大や繁殖肉用牛、酪農、養鶏、緬羊、山羊の飼養も復活するなど、農業者の皆さんの努力が形となって現れてきております。「美しい農のある風景を再び」の合言葉の下、村の農業再生アクションプランを取りまとめ、水稲や園芸作物などについても更なる拡大を図り、また、産業団地の整備と企業誘致を推し進めて、更なる働く場の創出にも努めます。

引き続き本格復興に向け、これらの取組を着実に進めるとともに、中山間地域での再生可能エネルギーの導入推進などにも果敢に挑戦し、今後とも、皆様のご支援やお力添えに感謝しながら、絆を大事にし、葛尾プライドでふるさとかつらおの再生、村の新たな創造のためにしっかりと取り組んでまいります。

村内に住まれる方、やむを得ず村外に住まれる方双方の思いをしっかり受け止め対応してまいります。皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願いします。

終わりに、東京うつくしま福島浜通り会の限りない発展と、会員の皆様の今後益々のご活躍を心から御祈念申し上げます。

東京うつくしま福島浜通り会
「創立30周年記念誌」発刊によせて

新地町 町長 **大堀　武**

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年を迎えられ、ここに記念誌を発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

貴会は、30年の長きにわたり、会員相互の親睦を図るとともに、首都圏とふるさとを繋ぐ架け橋となるべく活動を続けられ、また、会員皆様方には、各分野でのご活躍によりふるさとの名声を高め、郷土発展のために格別のご支援、ご協力をいただいておりますことに厚くお礼を申し上げます。

さて、甚大な被害をもたらした東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から、10年目を迎えようとしています。

これまで、貴会からのご寄附や表敬訪問をはじめ、各自治体および各企業等の皆様からご支援とご協力をいただき、復興事業を進めて参ることができました。あらためまして、心より感謝を申し上げます。

町の玄関口となる新地駅周辺には、「フットサル場」「複合商業施設」「ホテル・温浴施設」「文化交流センター」がオープンしました。沿岸部では、東日本大震災慰霊碑やモニュメントが設置されている「釣師防災緑地」が開園し、国内最大級の自転車競技施設「パンプトラック」も間もなく完成を迎えます。多くの観光客で賑わいを見せていた「釣師浜海水浴場」や夏の海のイベント「遊海しんち」は、震災後8年ぶりに再開しました。そして、相馬港でのLNGガス発電も操業を開始したところであります。

町の観光では、相馬港5号ふ頭に津波で被災を受けた「海釣り公園」を再建し、標高430mのふるさとの山「鹿狼山」では、毎年1月1日に「日本一早い山開き」と銘打って、早朝から約3,500人が登山を行い、気持ち新たに、初日の出を望んでいます。来町の機会がありましたら、是非一度は登頂し、復興している町の姿を一望していただきたいと存じます。

町は、これまで進めてきた「新地町第5次総合計画後期基本計画」が来年度で最終年度となるため、新たな計画策定に向けて取り組んでおります。誰もが住み続けたい持続可能なまちを築くため、多くの町民の方々や各種団体の意見を反映し、地域の特性を活かした、わかりやすい計画となるよう進めております。

今後も町民一人ひとりとの語らいを大切にしながら、豊かな自然と歴史に育まれた伝統と文化を活かして、新地町発展のための先人の熱い想いを尊重しつつ、町民生活に視点をおいた施策を推進しながら未来への新しい一歩を築いて参りますので、皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願いします。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会のますますのご発展と、会員の皆様方のご健勝、更なるご活躍を心からお祈り申し上げます。

「成長社会」から「成熟社会」へ

飯舘村 村長 **菅 野 典 雄**

飯舘村は一部区域を除き、平成29年3月31日をもって避難指示が解除となりました。

避難指示解除と言っても、ゴールではなく、あくまでも復興、再生のスタートラインに立ったというだけです。この八年間に及ぶ避難生活によって村民の皆さんの家族の形や、地域の姿も、そして村のあり方も大きく変わっていくことが考えられます。

そのような時、大切なことの一つに「自主自立」があります。もう一つは「心のシェア」ではないかと思っています。災害にあってしまった以上、愚痴や不満のみ言い続けても何の解決にもなりません。まず私たち一人ひとりが、「自分のできることは自分でする」という考え方が大切でありましょう。そうでないとたった一度の自分の人生を「マイナス人生」で終わってしまうことになるからです。

もう一つは「心のシェア」「お互いさま」という考え方です。「心を分け合う」「相手の立場に立って考える」というようなことが、復興には欠かせないものと思われるのです。今、世界は自分の所だけ良くなりたいという、いわゆる「ファースト主義」のオンパレードになっており残念でなりませんし、とても心配なことです。

今回の原発事故から、私たちは何を学んで、次世代へバトンタッチしなければならないのかが一番大切なことです。それは、経済成長だけが、国を救う道だという時代ではなくなってきているのではないということです。成熟社会の中で、どう発展していくかを考えていくべきだという試練を、私たちはこの原発事故から学ばなければなりません。これ程、物にあふれ便利な社会になっていながら、もっと便利に、もっと豊かにと願っていては、多くのエネルギーが必要になってくるわけですから、また多くの原発に頼ってしまうようになります。もう二度とこのような事故を他の人々にしてもらいたくはありません。

スペインのことわざに「多く持っていない人が貧しいのではなくて、多く欲しがる人が貧しいのだ」という大変興味深い格言があるそうです。

いつの日か子や孫たちから「あなたの世代は何もしてこなかったのですか」「私たちのために何もしてくれなかったのですか」と問いかけられないようにしなくては、ならないのではないでしょうか。このように思うのは私だけではないような気がします。

言うなれば、飯舘村だけでない、福島県だけでない、東北だけではない、まさに、日本全体、場合によっては世界が、これから先、どう考え、どう行動し、どう暮らしていくかということを一人ひとりが心の奥底から真剣に考えていくべき命題ではなかろうかと思っているところです。

お祝いの言葉

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
衆議院議員　小熊慎司

この度「東京うつくしま福島浜通り会」が創立30周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。また創立以来、会の運営や行事に御尽力されてこられた新妻会長様をはじめ役員の方々そして会員の皆様方に深く敬意を表します。

あの東日本大震災と東電の原発事故から9年が過ぎました。福島県そして浜通り地方の市町村も復興を目指し頑張っております。避難指示区域の解除や、JR常磐線の復旧など前に進んでいる所もありますが、まだまだ道半ばかと思います。皆様方の中にも御親戚や御友人の中に被害に遭われた方がおられたかと思います。この場をお借りしまして御悔みと御見舞いを申し上げます。これからも福島県と浜通り市町村の復興と振興に微力を尽くして参る所存です。

私は会津の出身ですが、浜通り会に出席させていただいた時の皆様方の温かい応対に感動致しました。出身地が違っていても同じ福島県出身であるという「安らぎ」を感じました。

どうぞこれからも東京うつくしま福島浜通り会が末永く続いていくことを、浜通り市町村がより良くなりますことを、何よりも会員の皆様が健康で幸福な人生を歩まれますことを御祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

浜通りと共に

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
衆議院議員　**金子恵美**

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年を心からお祝い申し上げますとともに、創立以来、会員の皆様の相互の親睦と故郷福島県浜通りの発展にご尽力されていることに敬意を表します。

東日本大震災・原発事故から現在に至るまで、故郷を思う会員の皆様に励まされ、浜通りは復興に向け一歩一歩前進してきました。政府は3月4日、全町避難が続いていた双葉町の帰還困難区域（特定復興再生拠点区域）の一部を先行解除し、5日には大熊町、10日には富岡町の特定復興再生拠点区域の一部の避難指示が解除されました。14日にJR常磐線が全線開通となり、帰還のための環境整備が進められようとしています。しかし、まだ、福島県内外に4万人以上の方々が避難している状況であり、課題も山積しております。復興の光が当てられている部分のみがクローズアップされがちですが、復興の影となっているところに光を当てることができるよう、「人」を中心とした復興を進めてまいります。

私の母は、富岡町で生まれ、幼少の頃、富岡町と浪江町で過ごしました。相馬市には近い親戚もおり、浜通りで過ごした時間を一生涯の宝であるとよく話しています。その母も80歳を超え、今は病床にありますが、懐かしい故郷が、震災後まったく違う風景となったことに対する悲しみと共に生きています。母と同じ思いの多くの皆様のその悲しみを忘れずに、私も故郷浜通りを支え続けることを誓います。

福島県浜通りの最も大きな祭礼で歴史的行事の一つに相馬野馬追があります。世界に誇る相馬野馬追の伝統を守り続けている全ての皆様に尊敬の念を抱き、衷心より感謝申し上げます。

3月22日、その相馬野馬追の里の一つである南相馬市鹿島区で、かしまの一本松を守る会の皆様が、かしまの一本松後継木植樹祭を開催しました。東日本大震災で、南右田行政区を襲った津波は70戸の家屋の全てと54人の住民の皆様の命を奪い、遺された方々は全ての希望を失いかけました。そのような中、たった一本だけ生き残った松の木が、住民の皆様に勇気と希望を与える存在となり、復興のシンボル「かしまの一本松」となりました。残念ながら、この松を守り続けた皆様のご努力もむなしく、立ち枯れが進んだため2017年12月27日に伐採されましたが、一本松から採取した実から2世苗木が育てられ、この度、植樹することができたのです。今後、東日本大震災で犠牲となられた方々の鎮魂の松林となり、後世に教訓を伝える場所となることと思います。私も一本松の子どもを植樹いたしましたが、引き継がれた一本松の命が、故郷の新しい命の輝きに繋がることを心から願っております。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会が、ますます発展されますことと、会員の皆様のご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。

祝　辞

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
衆議院議員　**亀岡偉民**

この度、東京うつくしま福島浜通り会が創立30周年を迎えられます事、心よりお慶び申し上げます。ひとえに新妻会長を始め、会員皆様によります継続の努力と郷土への愛情の賜物であると深く敬意を表する次第でございます。

さて、この10年の歳月の中でまず語るべきは、2011年に発災した東日本大震災・原子力発電事故です。特に浜通りの多くの方々が犠牲となりました。犠牲となられました皆様に謹んで哀悼の意を表します。私は当時、相馬・南相馬地域へと通い、支援物資の配布と要望をつなぐ毎日でございました。発災直後の各避難所にて、「生きていてもそうでなくても早く家族に会いたい」という多くのお声をお聞きし、仲間たちと遺体捜索もいたしました。全国から集まってくださったその仲間達には感謝の気持ちでいっぱいです。遺体確認もさせていただく中で、大自然の偉大さと備えの重要性、そして有事こそ政治の力が必要であると強く感じました。「やれることはなんでもやる、すべてやる」という精神で駆け回っておりましたが、これは私の政治信条にも追加された『想い』でございます。会員の皆様にも現在まで多大なるご支援をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。未だ復興は半ばでございますが、引き続き会員の皆様にもご協力いただきながら、一日も早い復興・再生へと歩みを進めていく所存です。その後も自然災害が頻発している昨今、震災時の経験を活かす事が重要です。大災害を経験した福島県だからこそ、浜通りだからこそ、災害に強い地域にしていきたいと思います。

また、私は文部科学副大臣兼内閣府副大臣を拝命し、教育行政及びスポーツ、東京オリンピック・パラリンピック2020等を担当しております。少子高齢化が進む中で、子どもの存在は日本の宝であり、教育行政も見直しが必要です。さらに人生100年時代になり、社会人経験を経て再び学びの環境に身を置く方も増えてまいります。公平な教育の場と共に多様な教育環境を整備し、豊かな国民の創出と国力の向上に寄与してまいります。

現在、新型コロナウイルスの影響下にて執筆させていただいておりますが、このウイルスにより大きく社会が変化しております。このウイルスの脅威に世界一丸となって打ち勝ち、延期となりました来年の東京オリンピック・パラリンピック2020を皆様と盛り上げていきたいと思います。震災後の福島の姿を世界の方々に見ていただき、復興・創生への弾みとしてくと共に郷土発展への英気へとしてまいりましょう。

東京うつくしま福島浜通り会の益々のご発展と、会員皆様のご多幸をご祈念申し上げます。創立30周年、誠におめでとうございます。

東京うつくしま福島浜通り会 創立30周年を祝う！

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
衆議院議員　**末松義規**

東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年、誠におめでとうございます！

東京の福島県出身者や、福島県にご縁のある方々の親睦を図りながら、福島県を大いに盛り立てておられる貴会に心から敬意を表します。

特に、新妻剛会長や幹部の皆様の暖かいお顔を拝するたびに、朗らかで明るいお人柄にますます魅せられております。

さて、福岡県育ちの私にとって福島県は特別の思い出があります。

大学生時代、自転車による東北一周旅行を計画し、福島県を縦断したことがありました。ちょうど雨の中、自転車で夜間走行をしていたのが福島県いわき市平の山奥。深夜2時頃に1人でとぼとぼ走っていた時に、恐怖の怪奇現象に遭い、その恐怖が原動力となって徹夜で逃げ走り、とうとう仙台まで行ってしまったという青春体験も懐かしく思い出されます。

同時に、福島県の方々の温かいご厚情にも触れさせて頂き感激しました。

そんな大好きな福島が東日本大震災で、特に大規模な原発事故で悲劇の主人公となってしまったことは痛恨の極みです。

大震災直後に私の方は、宮城県現地緊急対策本部長となり宮城県庁に陣取って救命・復旧・復興の陣頭指揮をとりました。その後、東日本大震災担当、特に福島県担当の総理補佐官となり(野田総理)、東電福島原発に足を運んだり、福島県の様々な代表団を総理に引き合わせ、現地の生々しいお話やご要望を伺い、福島県再建のために膨大な額の予算獲得や国家支援に向け精一杯尽力してきました。その後も初代復興副大臣や災害対策特別委員長としてずっと福島県の復興について微力を尽くして参りました。

さらに、その公職を離れた後も、私の地元の東京多摩の選挙区で、毎年福島県のお子様たちをお呼びして楽しんでもらったり、地元の福島県人会の福島産品を大量に購入したり、定期的に福島に出かけて行っては、商店街の活性化のために貢献をしてきました。

いまは大震災勃発から9年余が経過し、福島県も徐々にですが復興の道を歩んできて、地震や津波の被災地や放射能で汚染された地域にも少しずつ光が灯り始めたことを心からお慶び申しあげます。

そして今年から急に始まった新型コロナウィルス危機に対しても幾度も危機を乗り越えてこられた強靭な魂の持ち主として、貴会の皆様の強力なパワーとお知恵をお示し頂けるものと確信しております。

「東京うつくしま福島浜通り会」が、今後とも50年いや100年続き「皆様の暖かい心の寄りどころ」として続いていかれることを心から願っております。

記念誌発刊に寄せて

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
元復興大臣
衆議院議員　吉野正芳

福島県浜通り地方にご縁のある方々が相集って発足した「東京うつくしま福島浜通り会」が創立から30年をお迎えになられたこと、誠に慶ばしく慶賀にたえない次第でございます。

会のスタートは昭和から平成に改元されて間もなくのことであり、そして今は「令和」の新しい時代。今日迄の会の歩みは平成の歩みそのままであります。ふり返ってみますとバブルがはじけ経済低迷期間を経験し、さらには世界同時不況に陥り、失われた20年と称される時代を通過、経験しました。さらに平成の30余年の間のできごとで我々が決して忘れてはならないのが、東日本大震災であります。大地震と大津波、そしてそれに続く原子力発電所の事故。未曾有の大事故で浜通りの皆さんはじめ多くの方々が今も避難生活を強いられ、つらい生活を余儀なくされているのであります。

こうした中にあって復興を目指して懸命に励む地域の方々を激励し、援助の手を差し延べ、数多のイベントを企画し実践し、ふるさととの接がりを決して絶やすことのなかったのが、この浜通り会でありました。きっと多くのふるさとの方々が会員の皆さんの来訪を受け、頬をほころばせたことでありましょう。大いに勇気づけられ、力強く復興への歩みを進めた方もいらっしゃるでしょう。浜通り会の会員の皆さんの取り組みにあらためて敬意を表するものであります。

私も平成29年4月から525日間、復興大臣の任にありました。その間、福島県はじめ全ての被災地に足をはこび、それぞれの地域の復興・創生のために何が求められているのかをつぶさに自らの目と耳で確めてまいりました。共通して言えることは、心のつながりの重要性であります。絆と言い換えてもいいと思いますが、いざ大震災を経験してみると一番頼れるもの、最も希求されるもの、それが人と人とのつながりであるということを実感いたしました。

ふるさとを離れて首都圏に根を張り活躍されておられる浜通り会の会員の方々もこの思いを同じくしていただけるのではないでしょうか。

伝統は意図的に作り上げられるものではなく、歩みを進めたときに振り返ってみたらできあがっているものだと思います。

浜通り会の皆様方におかれましては、役員の方々と会員各位が互いにスクラムをがっちりと組んでさらなる歩みを続けていただき、今後益々ご発展いたしますよう心から強く念願するものであります。創立30周年おめでとうございました。

創立30周年にあたって浜通りへの思い

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
参議院議員　**岩渕　友**

創立30周年おめでとうございます。新妻会長はじめ、東京うつくしま福島浜通り会のみなさまには大変お世話になっております。

国会に送っていただいてから、早いもので間もなく４年になろうとしています。原発事故の被害をうけた福島の声を国会に届けてほしいという、福島県はもちろん、全国のみなさんの願いに何としても応えたいと力を尽くしてきました。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から９年が過ぎました。昨年の台風・豪雨被害に、新型コロナウイルスの影響が加わり、被災地は何重にも困難な状況となっています。

原発事故で発生した汚染水を処理したものの取り扱いをどうするかと共に、政府が検討しています。選択肢の一つとしてあがっているのが海洋放出です。

原発事故前、港で水揚げされた新鮮な魚介類は、そのまま食卓にのぼるだけではなく、加工されたり、飲食店や旅館などで提供されるなど、浜通りのくらしと生業は海とその恵みとともに営まれてきました。

それは、母の実家がいわき市にある私にとっての実感でもあります。遊びに行けば必ず、かつおや秋刀魚の刺身やメヒカリの唐揚げなど、魚料理がごちそうでしたし、夏には家族や親せきと海水浴に行くことが楽しみでした。

２月に、福島県沖で水揚げされるすべての魚介類の出荷制限が解除されました。「安全で安心なものを食べてほしい」という漁業者の方々が、丁寧に、時間をかけて取り組んできたからこその成果です。こうした努力や、くらし・生業をこれ以上こわすようなことがあってはなりません。

原発事故後、浜通りに何度も足を運んできました。天神岬から見たどこまでも続く青い海や、富岡町夜ノ森のこぼれるような桜など、その美しさや魅力を再発見しています。

同時に、原発事故の異質さを突きつけられてきました。昨年、双葉町にうかがい、町の様子や役場を見せていただきました。庁舎内は３月１１日のときのままになっていました。

先日、浪江町から福島市に避難をする７０代のご夫妻から話をお聞きする機会がありました。「自宅は帰還困難区域。自宅に立ち入ることも墓参りも自由にできない。自宅は猪が穴を掘ったり、植木を荒らしたり、被害が大きい。置き去りにされたよう。

一日も早く帰りたい。造林し、手入れをしてきた山のサイクルは60年から70年。今、木を植えないと孫に渡せない。樹齢300年のけやきは震災前なら300万円くらいで売れたはず。いまやパルプと同じ値段にしかならない。自分の代で先祖代々引き継いできたものをゼロにされるのは辛いし悔しい。安倍首相に、この荒廃した姿を見てほしい」と話をされていました。原発事故を終わったことにさせずに、被災された方々の生活と生業の再建に全力を尽くしたいと改めて決意しています。

むすびに、会のますますのご発展を祈念しております。今後ともよろしくお願いいたします。

30周年記念誌発行に寄せて

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
参議院議員　**佐藤正久**

梅雨の季節を迎えて雨音が近しくなりつつある昨今、東京うつくしま福島浜通り会会員の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げますとともに、会が創立30周年の節目を迎えられて本記念誌を発行されることを、福島県出身者として嬉しく思います。

平成23年3月11日の東日本大震災および福島第一原子力発電所事故の発生から9年余りの歳月が過ぎましたが、本年3月7日には常磐自動車道の常磐双葉インターチェンジが開通し、翌週の14日にはJR常磐線が全線開通しました。浜通りの復興に向けた社会インフラの整備が着実に進みつつあることに、少なからぬ安堵の気持ちを感じております。また、未だ道半ばではありますが、避難された住民の方々の帰還事業が進捗することを祈念して止みません。

今春、JR夜ノ森駅周辺の避難指示解除に伴って名所の桜並木の立ち入り禁止区域も縮小されるなど、故郷の風景が次第に取り戻されつつありますが、一方で原発事故発生当時のままの住宅や店舗などが無人の状態でその桜並木に隣接しているのも事実です。住民の方々それぞれにご事情はあるかと思いますが、これから先、より多くの方々が地元での生活の仕切り直しのスタートラインに順調に立てるよう、福島県選出の国会議員として助力を惜しまぬ所存であります。

さて、浜通りの今後の発展について思いを巡らしますと、復興の最重点事項である福島第一原発の廃炉作業が大きなカギを握っているように思います。事故を起こした原子炉の廃炉という前代未聞の作業を進める中で試行錯誤を繰り返しながら蓄積される経験や技術は、将来において日本国内外の老朽化した原子力発電所の解体等において欠くべからざるものとなるでしょう。そして福島県浜通りは、それら廃炉技術を確立した地として、永く記憶されていくのではないでしょうか。

また、廃炉技術の確立と並行して、新エネルギーの開発があります。現在、メガソーラー発電、風力発電などの再生可能エネルギーや次世代を担うと注目される水素エネルギーに関連した諸施設の大規模な実証実験・試験運用が浜通りを中心とした県内各地で行われておりますが、これら新エネルギー関連技術の一大中心地として浜通りが今後躍進していくであろうことは想像に難くありません。

最後になりましたが、昨今の新型コロナウイルス問題で首都圏在住の会員の皆様には様々なご苦労をされている方も多いかと存じます。会員の皆様が東北人特有の粘り強さを発揮し、ご自愛いただきながらこの困難な事態を無事に克服できますことを祈念いたしまして、本記念誌に寄せる私からのご挨拶とさせていただきます。

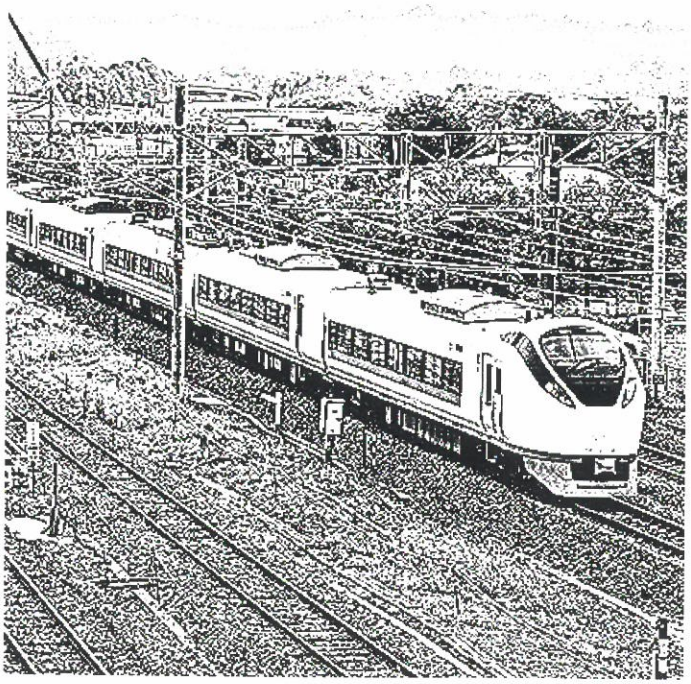
希望を運ぶ常磐線とともに浜通りの復興へ全力

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
参議院議員　**新 妻 秀 規**

大震災から９年。常磐線がついこの春全通し、本当に嬉しく喜んでおります。今は亡き父がいわき市北部の久ノ浜・波立海水浴場にほど近い田之網集落の育ち。私が子どもの頃はいつも夏休みに常磐線で上野駅から特急ひたち で平駅（現在のいわき駅）で乗り換え、普通列車で四ツ倉駅へ。楽しい思い出はつねに常磐線とともにありました。大の鉄道ファンだった中学高校時代には、四ツ倉駅から北へ、広野、富岡、浪江、原ノ町、相馬を経由して仙台へ。車窓から広がる太平洋の大パノラマに心躍りました。希望を運ぶ常磐線。９年ぶりに全通となった３月14日を、東京うつくしま福島浜通り会の皆様はもとより、何より地元のみなさまはどれほど喜ばれたことでしょうか。

私の親戚がいまも数多く浜通りに住んでいます。私にとっての心のふるさとです。インフラは整ってきましたが、ひとたび故郷を離れた方々が戻ってこないという切実な問題があります。

風化と風評という「二つの風」との戦いは、いよいよこれからが勝負です。政治に身を置く者として、課題に真っ正面に取り組み、浜通りの復興に全力投球してまいります。



復活した特急ひたち

創立30周年記念誌発行に寄せて

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
参議院議員　**増子輝彦**

この度、東京うつくしま福島浜通り会が創立30周年を迎え、記念誌が発行されますことを心からお慶び申し上げます。

はじめに、30年という長きにわたり会の運営、発展に御尽力されてきた新妻剛会長はじめ、歴代役員の皆様、会員の皆様に心から敬意を表します。

この30年間には様々な出来事がありました。中でも忘れてはならないのが、2011年3月11日の東日本大震災・東電福島第一原発事故です。原発事故は福島県浜通りを中心に強制避難指示が出され9年が過ぎた今も4万7千人以上の方々が避難を余儀なくされています。福島復興は道路、鉄道、建物等のハード面の整備は進んでいますが、事故後の第一原発は燃料デブリ処理を含め廃炉は最低でも50年以上かかります。また汚染水処理、中間貯蔵施設等の整備は遅れ一部帰還困難区域解除はされましたが、帰還者は双葉郡8カ町村で震災前の約平均25%であり会員皆様の故郷は厳しい環境にあり復興の道のりは遠く、遅れている心のケア、風評被害対策、生活支援などソフト面を一層重点的に復興支援する必要があります。復興には「光と影」があります。

このような状況のもと、これまでの貴会の復興への御支援に感謝申し上げます。

また昨年の台風19号・豪雨による災害でも多くの犠牲者がでたこと被災された皆様に改めて心からお見舞いを申し上げます。

福島第一原発事故を教訓として、一日も早く原発の無い社会創りを目指し「福島の復興・再生」に政治生命をかけて、引き続き取り組んで参ります。

貴会におかれましても故郷福島県、浜通りの新たな希望溢れる未来創造のために、引き続きの御支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、東京うつくしま福島浜通り会の今後の益々のご発展と、会員各位のご健康・ご多幸を祈念申し上げます

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年によせて

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
法務大臣
参議院議員　森まさこ

この度は、東京うつくしま福島浜通り会の創立30周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。新妻会長はじめ会員の皆様の、これまでフラガール甲子園をはじめとしたふるさと浜通りへのご貢献に心から感謝申し上げます。

私も30年前に福島県人会に入ってからずっと同じ浜通り出身として皆様にお世話になって参りました。2人の子どもを育てながらの弁護士生活、留学時代、金融庁時代、そして二度の大臣就任時とあたたかい励ましをいただき、心から感謝申し上げます。

私は9年間毎年3月11日に避難者の自宅に泊まってきました。第一原発サイトにも10回以上入りました。今年も3月7日には、総理と被災地に参りました。常磐線富岡駅、双葉駅にて運転再開の説明を受けました。9年前に津波で富岡駅が流された光景を思い出しました。線路も駅舎もすべて流されたところからここまで復旧するまでの大変な苦労をお聞きし、試運転車に乗ったときは感無量でした。そして浪江町の慰霊碑に献花し、黙祷を致しました。東日本大震災で犠牲になられた皆様のご冥福を心よりお祈りいたします。必ず復興を果たすとお誓いいたしました。12日は原子力発電所事故、14日は2回目の爆発があった日です。9年前のその日、私は夫とともに立入禁止区域内まで入り、周辺住民の救済に向かいました。

原発事故発生以降、県民に対するいわれのない偏見が今なお続いています。人権問題を所管する法務大臣として、被災地出身の政治家として、強い憤りを覚えます。法務省は以前から法テラスを通じて「被災者専用フリーダイヤル」を設置し、法律相談や支援制度の紹介を行っています。人権啓発や調査・救済活動を粘り強く行い、被災された方々に寄り添う施策を推進してまいります。

私ども内閣として、復興庁の設置期限の10年延長を決定いたしました。福島県は復興のその先を見つめて進み続けています。国家プロジェクトとして浜通り地域に最先端の技術・研究環境を集積し、新産業基盤を生み出すイノベーションコースト構想が着実に進められています。世界最大の再生可能エネルギー由来の水素製造施設「福島水素エネルギー研究フィールド」が3月に開所しました。また、いわき市では燃料電池バスが導入される予定であり、蓄電池関連産業の集積を目指すいわきバッテリーバレー構想も着実に進んでおります。私も何度も関連施設に視察に行っております。福島県の未来を照らす可能性を秘めており、とても期待しています。引き続き閣僚全員が復興大臣であるとの意識を持ち、被災地再生のため全力を尽くします。

今年で震災から9年になります。昨年の台風で、福島県は大きな被害を受けました。復興へ向けて再び立ち上がろうとしていた矢先でした。私は、災害発生直後から福島県内の被害を受けた市町村をまわり、それぞれの地域での実際の被害状況を国に伝えました。11月には、台風19号などで被災された方を支援する「被災者の生活と生業の再建に向けた対策パッケージ」が取りまとめられました。インフラの早期復旧や、資金繰り支援、雇用対策そして河川の改良復旧などが進められています。

新型コロナ対策、外国人労働者対策にも閣僚としてしっかり取組みながら、今後ともふるさと浜通りのために皆様とともに取組んでまいります。東京うつくしま福島浜通り会の今後益々の発展をお祈り申し上げます。

祝　辞

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
参議院議員　若松 かねしげ

東京うつくしま福島浜通り会創立30周年並びにこの佳節を祝する本誌の発行を衷心よりお慶び申し上げますとともにお祝い申し上げます。大変おめでとうございます。

日頃から、新妻剛会長はじめ東京うつくしま福島浜通り会及びふるさとの発展のためにご尽力いただいている皆様に改めて感謝申し上げます。

さて、2011年３月に発災した東日本大震災・原発事故より本年３月で丸９年を迎え、10年目に入りました。震災・原発事故は、福島県石川町生まれの私の人生を一変される出来事となりました。当時、私は議員浪人中でしたが、発災２日後には自らの運転で福島県に入り、中通り、浜通りと車を走らせました。３月１５日から３日間、いわき市の避難所で、被災者の方々の中に入り、バッチがなくてもできる支援を全力でさせていただきました。また、ワンストップで相談できる体制の必要性を感じ、被災した各県をサポートする国会議員の担当制を提案、実現し、現在でもその体制は続いています。

2013年７月、私は参議院議員として10年ぶりの国政復帰を果たし、2015年10月～翌年８月まで復興副大臣を務めさせていただき、副大臣在任中は常磐線全線再開を決める会議のとりまとめ役を務めました。さらに、浪江町に開所した世界最大の水素製造施設「福島水素エネルギー研究フィールド」をはじめ推進されている福島新エネ社会構想の基となる政策を予算委員会で安倍総理に提言した他、福島イノベーション・コースト構想の推進にも尽力し、現在、党内で水素社会形成推進小委員会委員長や福島イノベーション・コースト構想推進PT座長を努めています。浜通りの創造的に復興に繋がるよう引き続き、全力で取り組んでまいります。

皆様とともに浜通りの明るい未来を築いていくことと、ふるさと福島県並びに東京うつくしま浜通り会のますますのご発展をご祈念申し上げ、お祝いの寄稿とさせていただきます。

祝　辞

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
前衆議院議員　松木 けんこう

東京うつくしま福島浜通り会創立３０周年、誠におめでとうございます。

妻が大熊町出身だったことで皆様とのご縁を頂いております。

東日本大震災の際は、妻の実家も原発事故の被害を受け、義父母も避難所生活を余儀なくされました。故郷を失う悲しみの中で義父母は避難所の中でとても悲しい思いをしながら、大熊町への思いを胸に刻んでいたようです。残念ながら失意の中で他界することになりましたが、改めて東日本大震災がもたらした悲しみの重みを感じざるをえません。

震災直後は、私自身もなにかできることはないのかと思い悩んでおりました。ささやかではありますが、仲間と共に復旧のためのボランティア活動に入ったことを昨日のことのように思い出されます。とても長い年月が経ってしまいましたが、一方で元気な福島の皆様の姿、着実に復興の歩みを進めている浜通りの姿を見る機会を得る度に、力強さと勇気を頂いているような思いとなります。

しかし、原発事故を受けて多くの福島浜通り地区の皆さんが散り散りになり、見知らぬ土地での苦労を重ねていることは変わりません。

東京うつくしま福島浜通り会をご縁に結ばれた皆様と、少しでも一緒に頑張る機会をいただければとの強い思いは、震災直後のあの頃と全く変わらぬ思いです。大きな困難に直面しながら、多くの人々が人と人との絆を大切に、助け合い、励まし合って頑張っておられる姿を見る度に、私自身は北海道の出身ですが、浜通り地区の人たちの真のたくましさを感じます。

原発事故処理はまだまだ長い年月がかかることは変わりありません。もしかしたら、世代を超えた課題となってしまうかも知れません。

しかし、浜通り地区の土地が、かけがえのない故郷であり、失ってはならない土地であることは変わりません。本当の意味での浜通りの復興は、まだまだ先のことです。

しかし、そのような中でも決して悲観的になることなく、全国で福島を応援する多くの人たちと共に自分ができることを、細やかなことでも、一つ一つ小さなことから繰り返しとり組んでいくことが、浜通りにご縁を頂き、東京をはじめ全国各地で暮らす全ての人々にとっての役割なのかも知れないと思っております。これまでの十年間、復旧復興を目指し、本当に多くの皆様が懸命な努力を続けられてきました。

一方でこれからの十年間は、これまでほどは復旧復興への思いが、現実から忘れられる状況となるかも知れません。私は浜通りの外で暮らす者の一人として、やはり浜通りから離れて暮らす多くの皆さんに、しっかりと浜通りへの暖かい応援の気持ちを持ってもらうためにしっかりと役割を果たすことが大切だと思っています。

真の復興、震災前の状況になるまでには長い時間がかかるのだということを改めて自らの胸に刻みながら、次の十年と浜通りへの自分自身の思いをどう形にしていくことができるか、改めて考えてみたいと思っています。

それが亡き、義父母の供養にもなると思います。

浜通りに復興の灯を

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
福島県議会議員　**真山祐一**

本年３月14日にJR常磐線が９年ぶりに全線開通した。JR常磐線は、帰還困難区域内を走るため、様々な困難を乗り越えての全線開通である。復旧に尽力した関係者に心より敬意と感謝を申し上げたい。

９年前には無かった新しい駅ができた。「Ｊヴィレッジ駅」だ。原発事故の対応に当たる拠点として機能していたＪヴィレッジだが、現在は、復興のシンボルとして従来の目的通り、アスリートたちの聖地として機能している。

新型コロナウイルス感染症の影響により、東京オリンピック・パラリンピックが延期となり、Ｊヴィレッジをスタート地点として出発する予定であった待望の聖火リレーも延期となってしまった。しかし、その災いが転じてＪヴィレッジに聖火が保管・展示されることになった。現在は、感染症対策のため展示を中止しており、その保管の在り方も今後協議されるが、Ｊヴィレッジで聖火が今も燃え続けていることは紛れもない事実である。

Ｊヴィレッジのキャッチコピーは「IGNITE　YOUR　POTENTIAL ～可能性に、火を灯せ。～」。明年３月で東日本大震災から10年。結果的に、その節目の年に復興五輪が開催される。復興五輪の火が灯り、浜通りが可能性の扉を開く１年にしていきたい。

「創立30周年記念誌」への寄稿

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
元法務大臣
元衆議院議員　田中慶秋

東京うつくしま福島浜通り会、創立30周年記念誌発刊おめでとうございます。

私は浪江町で生まれました。特に、地元の大堀小学校・中学校・双葉高校の思い出は、人一倍あると思っています。子供時代の美しい自然の恵みのなか、川、海、山の思い出がよみがえってきます。川では、高瀬川で鮭をとり、海では海水浴と山への探検と少年時代の幼児教育に大切な浪江の自然環境が自分を育ててくれたと思います。高校時代は柔道をライフワークに日々勉学に励んでいました。社会では、福島出身の日本医師会長の原中氏や民謡の原田なおゆき氏など大変活躍しておりました。私も東京の大学卒業後は民間企業の小糸製作所（神奈川県）に就職しましたが、東京に比べインフラ整備の遅れ、高度成長期でありがちな労働環境への疑問に自問自答が始まりました。一企業人としては、何もできないとの自身の結論と至りました。ある機会の出会いにその志を持って、神奈川県議会議員に昭和46年に立候補しました。おかげさまで当選することができ、県議会議員を3期務めましたが、そこでまた、新たなジレンマが起きていました。当時は日本の政治の仕組みは、地方自治での大きな問題解決の多くは中央がすべてを決めていました。その仕組みを変えるべくことの改革を新たな大意として衆議院議員に挑戦し、6期務めることができました。今では、中央から地方へとの言葉が現実となっています。

東日本大震災に見舞われ幼少時期の思い出の川、海、山は、ことごとく失われ、いまだ復興の途中ではありますが、福島出身者の4団体がこのような状況のときこそ出身者たちの熱い思いを一本化し、故郷の再生に立ち向かうことが私の望みです。

想　い　出

東京うつくしま福島浜通り会　顧問
元法務大臣
元参議院議員　**岩城光英**

私は昭和24年12月に生を受けました。

父は平警察署（現在のいわき中央署）管内の神谷駐在所に勤務しておりました。

誕生してすぐ、父は会津高田警察署に転勤になりました。父の任地となった赤沢駐在所は、町から離れた山に入った所で、冬には1メートル以上の積雪がありました。

小学生になる年に、父が田村郡の小野警察署に異動になり、小野新町小学校に入学しました。

卒業した年に、父は磐城警察署（現在のいわき東署）に転勤になり、私は小名浜第二中学校に入学しました。ようやく浜通りに戻ってきたのです。

その時にびっくりしたのは、言葉です。漁業関係者が多い地区なので、気性が強くて言葉も荒っぽい。穏やかでのんびりとした山あいの会津や中通りのそれとは全く違っていました。

住まいは小名浜代官所跡地近くの高台にあり、そこから小名浜港を望むことができました。

「高台に陽はふりそそぎ　みはるかす紺碧の海」母校、小名浜二中の校歌の出だしです。それまで、いわば山の中での生活を送っていた私にとって、それはそれは新鮮な印象でした。

父が初代警備艇「てるしま」が配置された水上派出所に勤務することになり、私も海をより身近に感じることになりました。

今でも洋々たる海を前にすると、心が洗われる思いであり、夢や勇気がたぎってきます。まさに坂本龍馬の雄飛の想いに浸ってしまいます。

磐城高校に入学した年の夏、体力がなく遠距離通学に疲労していた私を案じた両親は、高校の近くの平旧城跡に古い住宅を買い求めました。「お城山」と呼ばれていた所ですが、文字通り、磐城平城の本丸跡地のすぐ近くに住むことになりました。

磐城平藩といえば、黒船来航に揺れる幕末の激動期、藩主安藤信正公は老中として平和外交推進に手腕を発揮しました。幕末の政局を安定化し「国民のため」という視点を持ち、人々に安心を与える政策を着実に実行していたと言われています、英国公使オールコックも安藤公の持つ貴族の気概と政治家たる義務感に驚き、洋の東西を越えたノブレス・オブリージュに感嘆していたと伝えられています。

できれば、安藤信正公をテーマにした大河ドラマが実現してほしいと願っています。

私が大学を卒業する頃、父は四倉派出所に所長として勤務し、官舎に住んでいました。四倉も海の近くで漁業が盛んな地区です。

昭和49年12月4日、がんのため、父が息を引き取りました。53歳でした。その日は、私の25歳の誕生日でもありました。

父の葬儀を官舎で執り行うことになり、四倉の皆様には本当にお世話になりました。

先日、昭和37年東宝映画「地方記者」（キャストはフランキー堺、白川由美、夏木陽介、星由里子）のロケがいわきで行われたということを知りました。当時の四倉警察署（後の四倉派出所）の建物も舞台になっており、とても懐かしい想いでＤＶＤを観ました。

54年前、14市町村が合併して誕生したいわき市。広域性、多核性、多様性を有する、いわば「いわき合衆市」の飛躍を、浜通りのためにも心から願っております。

浪江町の思い出２題

東京うつくしま福島浜通り会　相談役
浪江町名誉町民　荒　　義尚

1.「先生の手」

あれは確か浪江小学校４年の時です。 まだ戦後間もない頃で、学期末試験の算数の問題が粗末なワラ半紙にガリ版で印刷されていました。「始め」という先生の声で解答に取り掛かったのですが、私には易し過ぎて、20分もしないうちに全問の解答を終えてしまいました。 自慢話になりますが、私は、成績が良く、特に算数では、先生が用事で中座する時など、先生の指示で代わりに教壇に立ったくらいですから、もう何もすることがないので、ぼんやり前の方を眺めていたのです。

その時、教室をゆっくり廻っていた先生がふと私の右後ろで立ち止まった気配を感じたのです。 先生の足音が止んでしばらくして足音はまた始ったのですが、私の脇を通り過ぎるその瞬間、先生は、私の机の端の方に左手を軽く滑らせながら、ほんのごく一瞬、答案用紙のある一点を指し示すような仕草をされたのです。 そして、またゆっくりと教室内をこつこつと廻って行きました。

私は、しばらくしてから、何気なく、先生の手が指したあたりの答案を見たら、何とそこだけが間違っていたのです。 私は、帰宅してから、そのことを考えました。 先生は、私への温情と激励の気持から、先生としての倫理感のギリギリの極限点を冒すリスクをとってくださったのだ。 しかし、そんなことが今後絶対にないよう、しつかり勉強しようと子供心にも固く決心したのです。 先生は、もう20年も前に亡くなられましたが、いつも先生の激励が私の背中を押してくださっているのだと深い感謝の念を抱き続けています。堀泰（ほりやすし）先生が先生のお名前です。

2.「小川と柳の並木」

これも昔の話ですが、亡くなった母方の祖父の昔話のなかで、明治・大正時代の浪江町の様子が非常に印象に残っています。 私の母が娘の頃は、夏の夕方には浴衣掛けで団扇を持ち、現在の権現堂の通りの真ん中を流れる小川の柳並木で夕涼みをしていたそうです。当時は、自動車が通るわけではないので、小川の両側には荷車が通れるくらいの細い道があったようです。

この小川は、その後埋め立てられ、その代わりに川を二筋に分け、道路の両側に通したのです。 私が子供の頃は、その幅１メートル程のドブのようなところにはドジョウや鮒や鰻などがたくさんいたので、楽しい魚取りの場になっていました。 しかし、今ではそのドブもコンクリー トの蓋で覆われ、それに気が付く人も稀になってしまいました。

「3. 11」後、私は、毎年１、２度程帰郷していますが、いつも無人の通りの側溝を見て、娘時代の母を思い出しています。 浪江町の本格的な再建はまだまだ先の話ですが、いつか「小川と柳並木」の復活の夢を誰かと語り合える日を待ち続けています。

父霧島昇との思い出

東京うつくしま福島浜通り会　相談役
東京音楽大学大学院　名誉教授　**坂本紀男**

父は大正三年六月に相馬軍大久村の農家に生まれました。

久之浜小学校卒業後まもなく上京。新聞配達、タクシーや劇場の呼込みなどのアルバイトをしながら貧乏生活が続きました。

喧嘩にも負けた事が無く腕っ節の強さが自慢であったのでボクサーを目指した事もありました。

しかし直ぐにやめてしまいました。

これには裏話があり信満々で挑んだデビュー戦１ラウンドでノックアウトされたのが実情である事を酔った弾みで自白しました。私も初耳でした。

歌手への希望もあった父は、劇場の前歌や祭りの屋台で一束いくらで売っていたレコード会社で吹込みをしたりしてチャンスをうかがっていました。

この屋台で流れていた父の唄を偶然通りかかったコロンビアレコードの文芸部長の耳に入りスカウトされました。

一杯七銭のカレーライスにも中々ありつけなかった父に提示された契約金がなんと五百円、今まで見た事もない大金に仰天、このままどこかに売り飛ばされるのかと思ったそうです。

この頃、母（ミスコロンビア松原操）は、コロンビアのドル箱歌手として活躍していました。

昭和一三年、松竹映画「愛染かつら」の主題歌「旅の夜風」を歌う歌手選考に当たり、女性歌手は母松原操に決まっていました。

男性歌手については、まだ新人であった父霧島昇に白羽の矢が立ち、コンビが誕生し「旅の夜風」は映画「愛染かつら」と共に空前の大ヒットとなりました。

この曲が縁で二人は山田耕筰ご夫妻の媒酌により結ばれて、その結果私が生まれました。

この曲は、私にと取っても生みの親です。

父のヒット曲「誰か故郷を思わざる」は今でも皆様に歌い継がれ、特に福島の方々にはテーマソングのように歌って頂いております。

父もこの曲には思い入れも強く、歌う度に故郷の山や川、子どもの頃の事を思い出すと感慨深げに話していました。

私は間もなく八十歳を迎えます。毎年、銀座ヤマハホールで東日本大震災支援コンサートを開催しております。あと何回開催できるか分かりませんが、父は九十歳まで歌うと言っておりましたが志半ばにして途絶えてしまいました。さぞ無念であったでしょう。

私は父の遺志を引き続き九十歳まで歌い続ける決意でおります。

創立30周年を迎えて会への想い

東京うつくしま福島浜通り会　相談役

井戸川　妙

創立30周年記念誠におめでとうございます。

例年ならこの季節は桜の花も満開で多くの花見客で賑わっている事でしょう。

近年は、自然災害が多く地域によっては応急復旧・復興に追われる大変な上に今年は、中国武漢市で発生した「新型コロナウイルス」感染で亡くなれたご遺族の方々に謹んでお悔やみ申し上げます。

私は、平成10年に高校同窓の新妻　剛会長からのお誘いで本会に入会いたしました。平成10年10月「東京福島県人会浜通り会」会誌編集委員会が設置されました。編集長に任命され、編集委員一同業務にあたりました。数々の苦労もありましたが、寄付金集めと会誌の表紙を東電福島発電所の写真を選び、東電本社の広報と交渉したのですが断られ途方に暮れ色々と模索しました。妙案が浮かばず困り果てていましたが原子力発電所の所在地の大熊町の志賀町長とは小学校・旧制中学・高校の同級生の同級生と言う間柄であることを思い出し、窮余の一策でお願いした所、現地の原子力発電所所長に事情を話し希望の原子力発電所「全景写真1枚と寄付金」まで頂戴し多いに助かりました。

若くして会長に就任した新妻　剛会長はご苦労も多あった事と思いますが常に精力的に会の運営に当たる姿には敬意を表します

私も数々の思い出が走馬灯の様に頭の中をよぎりますが、平成11年10月実施された「第19回全国豊かな海作り福島大会」が相馬市の松川浦漁港で開催された、この日は強風の中「天皇皇后両陛下(現上皇・上皇后)」ご臨席された場所で実施された行事が思い出します。

東京電力福島原子力発電所の見学は、大熊町志賀町長のご厚意で原子炉建屋内の管制室では関係者から細かい説明を受け担当者が各計器を監視している姿を拝見して安心しました。

○ふるさと訪問事業では、下記の通り各市町村で行われた事業の一部紹介です

(1) いわき市

小名浜の花火大会見学会

アクアマリンふくしま水族館は東北最大級の楽しく学べる水族館として日本では非常に珍しいサンマの採卵から孵化し飼育をしている

(2) 楢葉町ふるさと訪問天神岬の温泉旅館（1泊2日）で草野町長と対談

(3) 富岡町ふるさと訪問　桜の花とJR夜ノ森駅構内左右のつつじ（サツキ）

宿泊所は「リフレ富岡」（1泊2日）翌日富岡町長、幹部と同施設の入口に紅白の桜の苗木を植樹した

(4) 大熊町ふるさと訪問　町役場志賀町長を表敬訪問

講演会：講師（俳優・参院議員）中村敦夫氏

夕方宿泊所：富岡町リベラルハークホテル

翌日は、地元のゴルフ愛好者が中村敦夫を囲むゴルフ会を計画していたが翌朝ゴルフ場が一面真っ白な雪が積もりゴルフは中止となり富岡駅から常磐線で東京に帰る

(5) 相馬市　ふるさと訪問：相馬野馬追いは相馬各地域から集まった騎馬の馬軍団が打ち上げた神旗を豊作願って神旗を奪い合う様は壮観である（現在は観光色が強い）

(6) 皇居、国会議事堂、内閣総理大臣官邸参観
通常一般人は容易に立ち入ることが出来ない皇居内、国会議事堂の参観（当日は予算委員会を傍聴）、総理大臣官邸では、大臣就任式後の記念写真撮影した場所で我々も記念に撮影“パチリ”

(7) 倉田寛之参議院議長表敬訪問
参議院議長公邸議長執務室で倉田議長の出生地は福島県双葉郡楢葉町（旧双葉郡龍田村）とご本人から聞き非常に驚きました。倉田議長は穏やかな方で色々と話され公邸の庭園で記念撮影しました。

他には赤坂の迎賓館を見学　日本にも優雅でこんな素晴らしい施設が有り、館内にはお客を迎える階段（旭が指す方向）もう一方の階段は沈む夕日沈む姿が見られるような設計になっておるので素晴らしい設計と思えました。

私は、昭和７年生まれの高齢者（米寿）のため本会の会則にある諸行事、特にふるさと訪問などの長距離旅行などは参加出来かねますので今後ともよろしくお願いいたします。

倉田寛之参議院議長表敬訪問

報　徳　仕　法

東京うつくしま福島浜通り会　相談役
ゲームフリーク取締役会長　田尻義雄

幼い頃、祖父母から聞いたことを思い出して書いてみたいと思います。

かつて破綻寸前だった相馬藩を立ち直らせたのは、報徳仕法（至誠・勤労・分度）でこの三つのことを藩主以下領民もしっかり実践した。

解りやすく言えば、ごまかしたり、嘘をついたりせず、しっかり働き、得た収入は倹約して、しっかり貯えてその時のために取って置くことだ。

相馬藩は報徳仕法を実践した事により、30万石の借金を見事に返済した。具体的には、藩の財政を6万石から1万石とした。

私の生まれ育った田尻村と末の森村は協力して二宮尊徳の弟子荒川専八の指導で田尻江の建設をおこなった。

高瀬川の上流から水を引き、田尻村・末の森村の水不足を解決した。

これが田尻江です。当時の公共事業ともいえるこの水路は現在も一部使用中で役に立っている。

田尻村・末の森村は水不足の解消により、田畑は潤い米も麦も実り領民は健全な生活を営める様になった。

私が生まれ育った田尻家では、昭和30年頃迄　至誠・勤労・分度　この三点は愚直に実践されていた。

事情が有ろうが、時代が変わろうが報徳仕法の精神はかわらないと思う。

田尻江（たじり）

元治(1864~1868)の頃、二宮尊徳の高第であった富田高慶が二宮仕法によって高瀬川焼築地点に堰を構築し元治、慶応、明治(1864~1912)と続く長年月を費やして利水を計ったものであった。

高瀬川渓谷の山肌に洞門をのみで堀りました。
（何百人が費やしたのだろう。）

岩壁の中段に水漏れがないようにコンクリートを運び練り上げました。

民謡は心のふるさと
歌い続けて60年

東京うつくしま福島浜通り会　相談役
芸能福島県人会　会長　**原田直之**

早いもので民謡を歌って60年になります。ふるさと浪江町に生まれて　双葉高校2年生の時に恩師我妻桃也先生の民謡教室に入りました。3年生の時にNHKのど自慢全国大会福島県大会で民謡の部で1位になり、東北大会に出場、これを機に卒業後、仙台の我妻先生のところで内弟子修行に入りました。2年後先生の許しを得て東京へ、池袋白雲閣芸能部に入り、本格的な民謡生活、折から民謡のブームに恵まれ、NHKテレビ「民謡をあなたに」のレギュラー出演、金沢明子さんと全国各地を公演しました。そして、レコード会社コロムビアに専属歌手として入社、現在に至ってます。教室原田会を設立、現在も各地で活動しています。

今でも歌っている時に想うのは、やはりふるさと浪江町です。美しい山と川、そして海の風景です。自分の民謡を育てたものです。

東日本大震災後も何度か街を民謡で慰問しましたが新相馬節を歌うと皆が涙を流してくれます。そして一緒に歌ってくれます。こんな時にやっぱり民謡はふるさとの唄だなと感じます。これからもこのふるさとの唄を大事に歌ってゆかねばと思います。ふるさとの復興を願って、ふるさとへの応援歌として。

◇◇◇

コロナウイルスとリモートワーク

東京うつくしま福島浜通り会　相談役
箭内克寿

世界のすべての国を紹介する本を出そうと、この一年かけて執筆・編集してきた。

東京オリンピックは延期となり梯子を外された感があるものの、家庭に一冊の心意気で進めている。

大国も小さな国もすべてを網羅して、基本のデータをつけて、その国のシンボルとして世界遺産のスケッチをつけた。世界遺産のない国にはその特産物をいれた。

コラムとしていま世界の中での日本の存続のために考える課題をちりばめた。食料自給のこと、移民（人口減の穴埋め）のこと、国力のこと、国際交流のこと、キー・カレンシイ（基軸通貨）とビット・コイン（仮想通貨）、地球環境問題などなど。

世界はコロナウイルスの脅威のなかにある。その対策でみな手いっぱいでこうした事々を考える余裕はないかもしれない。　しかし中国の一都市に発した新ウイルスの世界へのまん延の速さと広がりとによって多くの人が国際交流の深さを知ることにもなった。

東北復興のシンボルとしての聖火のリレーは福島から全国をつなぐ予定であったとされるが「東京オリンピック 2020」のなかでどう灯し続けられるのだろうか。この一年をかけ全国を駆け巡るとのアイデアもあるようだ。それにしても新コロナウイルスをまず征服することが肝要だ。

コロナウイルスのコロナは王冠の意味で、このウイルスのトゲトゲを王冠に見立てた命名という。このトゲトゲが人の粘膜に吸着して呼吸を阻害するなどして人の命を奪う。いわゆるインフルエンザのウイルスもコロナウイルスだ。毎冬インフルエンザからの肺炎などで死亡する。新コロナの怖いところは症状のない者にも伝染力があることと、その感染力・死亡率の強さだ。そのため世界の国々では国・都市の閉鎖などによってその伝染を断つ手段をとっている。こうして国際的な経済危機が深まっている。学校閉鎖もなされこの機会にネット・エヂュケイションが、会社ではリモート・ワークが注目されている。おりしも通信システムの進化もあり、5G をベースとしてこうした動きをサポートする環境も確認されてきた。日本の都市集中型のサラリーマン生活もこれを機会に地方分散型に大きく舵を取ることになればと期待する。

朝晩のすし詰めの満員電車で通勤し、パソコンのない時代にソロバンとタイガー計算機や計算尺で国民統計の計算などをまさに労働としてやってきた者にとってはこれはまことに幸せな時の到来だなと失われた青春をほろ苦く思うこの頃だ。

その活動をいささか支援している近くの大学の桜は卒業式も新入学の祝いもなくひっそりと咲いて散っていった。こうした時の流れの中で社会人生活と大学生活がこれまでの殻を突き破ってさらなる異彩を放つこととなり革新の花を咲かせるものと願う者の一人である。

私たちが折につけて集まり、話し合っている時事問題研究会では皆が高齢となってきたこともあり「老人の生き方」についての提言書を取りまとめた。要は健康第一として、次世代の繁栄を見守るとの心がけである。

福島県浜通り駅伝大会

東京うつくしま福島浜通り会　筆頭副会長

大清水 善 信

私の高校時代、福島県浜通り駅伝大会が毎年２月に開催されていました。実業団チームと高校チーム合わせて25チームくらい参加していました。

スタートは相馬駅前を朝８時にスタート、約100km10区間でゴールは当時の平市公会堂前でした。

実業団チームでは郡山自衛隊、高校では相馬農業高校が強かったです。当時の相馬農業高校は全国大会にも出場し、その内の一人の選手は高校総体で２位、高校卒業後は旭化成に入社をして活躍をしていました。

私は１年生の時は地元の浪江から双葉までの区間を走り、２年生の時は相馬から鹿島までの１区を走りました。この時は前日に相馬のちょっとした芸能人も泊る高級な旅館に泊まったことを記憶しています。実業団チームと高校生チームが一斉スタートで力の差はだいぶあり順位は後方のほうでした。

３年の時は、富岡から広野まで最も長い17kmの距離、特にこの区間は富岡でタスキを受けるとすぐに上り坂、その後富岡町から楢葉町に入るときの長い上り坂、高校生では大変きつかったです。

現在は週４～５回程度ジョキングを続け、健康づくりのため時々市民マラソン大会にも参加をし人生を楽しんでいます。

ふるさと浜通りをみつめ続ける私

東京うつくしま福島浜通り会　副会長

志 村 康 子

昭和63年に浜通り出身者により、東京福島県人浜通り会が設立。30周年を迎えられたこと、本当におめでとうございます。

「ふる里は遠きにありて思うもの」とはいえ、離れてみて初めて知る良さ、海・山・川など自然に恵まれた中で育ち、たくさんの人と関わり「人を思いやる気持ち」「自然を大切に」と育てられ「民謡と相馬野馬追いの里」相馬市出身の私です。平成17年入会、現在にいたります。

洋々たる太平洋、阿武隈の山並に広がる自然の中、平成23年３月11日100年来の未曽有の東日本大震災に見まわれ、地震・津波・東京電力福島第一原発事故の放射能漏れで避難指示。昨年は台風による水害に！　町・村が消え、行方不明、多勢の死者、大惨事に見まわれた浜通り！

私達、東京うつくしま福島浜通り会も避難地訪問、義援金活動、市町村訪問、植樹祭の植樹など、市町村に支部をもうけて地元との交流の架け橋にと活動しています。

風化、風評を払拭し、１日も早い復興に向け、活気あふれるふるさと作りに全力を尽くして参りたいものです。

福島の良さを次世代に伝えて、そして10年、20年後、活気あふれるふるさとを見つめ続けていきたい私です。

来年は桜に会いに行きましょう

東京うつくしま福島浜通り会　副会長
髙 橋 恒 子

桜の季節となると、道の両脇が間断なく桜並木が続く「桜のトンネル」が蘇ってきます。

私の郷里は、東北の桜の名所の一つに称される「夜の森の桜」のある富岡町です。

「夜の森の桜」の歴史は、南相馬市(旧小高町)から入植した半谷清寿氏が明治33年開拓記念にと300本のソメイヨシノを植樹したことに始まり、現在は、約1,500本の桜が、「桜のトンネル」をつくり道路全体をピンクに染め、開花期間中は、ライトアップもされ、昼夜を問わず多くの花見客で賑わい花見の名所として親しまれてきました。しかし、2011年3月11日に発生した東電福島第一原発事故により立ち入ることが出来なかったのですが、2017年から一部が解放され、2020年の今年は、常磐線夜の森駅周辺の鉄道区域と駅に至る県道や町道を歩いて花見を楽しめる区間が、約800メートル広がったこと、常磐線が9年ぶりに全線開通したこと、また、3月に公開された「Fukushima50」のラストシーンとなるなど明るい話題も多く、ソメイヨシノが私たちの目を楽しませてくれるものと期待しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が収まらない状況で、外出や旅行がままならず花見に出かけることが出来ませんでした。来年は是非皆さんと「夜の森の桜」に会いに行きましょう。

郷里への想い

東京うつくしま福島浜通り会　副会長
品川区議会議員　**西 本 貴 子**

東京うつくしま福島浜通り会30周年を深い想いで迎えています。会との出会いは、品川区議会議員になり、同郷出身の先輩議員である高星正利先生から紹介いただき入会しました。今は亡き高星先生から様々郷里への想いを聞かせていただき、この会の意義を学び、さらに郷里への想いが強くなったと思います。生まれ育ったいわき市では、両親が老体に鞭打って美味しい梨を作っています。なかなかお手伝いに帰郷することはできませんが、送ってくれた梨を頂くごとに懐かしさと両親への想いが募り、格別に美味しく感謝で一杯になります。

2011年3月11日東日本大震災から10年目を迎えましたが原発事故で多大な被害を受けた浜通り地方の復興には、まだまだ長い道のりです。帰郷すると復興状況を知るため、小名浜、久之浜、草野、豊間地区など海岸通りを車で回ります。瓦礫はすでに無くなっていますが街再生には程遠いと実感します。小さい頃、家族で磯遊びをした思い出多い、海岸ですが、その姿も変わってしまいました。残念ではありますが、新たな街への再生、将来への希望も感じられます。郷里に対し何ができるか、東京うつくしま福島浜通り会の仲間たちと様々な行事を計画し、さらなる復興支援を継続して参ります。

汽　車

東京うつくしま福島浜通り会　幹事長代理

泉川安雄

常磐線が令和２年３月１６日に富岡と浪江間が開通した！

今は山中今は浜　　今は鉄橋渡るぞと

思う間も無くトンネルの　　闇を通って広野原　（汽車の歌詞）

東京と仙台の直通運転が再開したという。

思い返せば高校時代の汽車通学から昭和42年上京した時やその後の帰省等にどれほど利用しただろう。

当時は蒸気機関車だからトンネルが近づくと蒸し暑い車中でも上げ下げ窓を開け閉めした。煙で白いシャツに煤が付くからだ。

また、夜行列車では座椅子を傾けてどうにか寝台を工夫したりもした。

小高駅から桃内駅そして浪江駅と上野駅まで駅名を空で覚えていたものだ。

その後はもっぱら高速道路で帰省し、帰路には詰めこみし切れない程のお土産を積んでもらえた。なんでもお金の生活には有り難いことだった。

ガソリンさえ満タンにしてくれた。田舎には唯々感謝しかない。

電車で福島に帰ることは無くなって久しい。

なんとも懐かしい思い出だが、コロナの自粛生活が明けた折には電車で行きたい。そして車窓から景色を眺めながら“汽車”の歌を口ずさんでいると思う。

創立30周年記念誌に寄せて

東京うつくしま福島浜通り会　副幹事長

竹内久美子

昭和63年創立以来、会員相互の絆を深めながら着実に発展を遂げられ、このたび30周年を迎えられました。平成20年33月に発刊された記念誌を受け取り、想えば10年前は、なんだ、かんだと会議の連続でした。

原稿の寄稿者が多ければ多いほど、そしてこの記念誌が読まれれば読まれる程、会の絆は強くなります。生まれ故郷を遠く離れ、首都圏にお暮しの皆様が心置きなく、ふるさと訛(なま)りで語りあえる場があることは、なによりの宝ですね。育った土地、気候風土、食べ物、文化習慣を同じくする「東京うつくしま福島浜通り会」ならではのことです。

浜通りは太平洋が一面に広がり、まさに海洋地域としての特性を持ち、そのことが温かな大きな心を持つ大人としての風格を備えた明るい人材を育んできました。東京うつくしま福島浜通り会の皆さんは、まさにそんな環境を東京でも作り上げてきました。私もみなさんとの出会いに感激感動「一期一会」を大切にしてきました。そして一緒に故郷のため、日本のために新な時代に向かって全力投球をしていきたいと思います。

ふるさと浜通りも変化しつつありますが、この変化が地域に住む方々の生活向上につながるものでなければなりません。東京うつくしま福島浜通り会も心の絆をつなぐという大きな使命を持っていると思います。これからも、ますます多くの会員が楽しく集い心の絆が強く結ばれるよう願っております。

記念誌への寄稿の機会を得たことに感謝申し上げます。

避難！・・・その後

東京うつくしま福島浜通り会　副幹事長

半谷一芳

私は、浪江町大堀の出身です。平成23年3月10日まで、60年、そこで暮らしていましたが、あの東日本大震災・原子力発電所事故の日（十一日）から、生活の拠点が今は「望郷の地」となってしましました。東京電力の原発事故により、一瞬にして穏やかな生活・生業を奪われ、大堀は、今だに「帰還困難区域」です。許可がないと入れません。何とも悔しい限りです。

しかし、いつまでもくよくよしていては始まりません。このため、苦渋の決断でしたが、「千葉県君津市」に移住しました。ですが、何といっても知らない人ばかりの街。どう地域の方々とお付き合いすればいいのか、悩みました。

そこで、近くの神社の祭りに参加することとし、「大宮神社祭保存会・睦会」に入会させて頂くことから始め、御神輿担ぎや越年祭・元旦祭・節分祭などに参加しています。このことは、地域に溶け込むには、良い方法でありました。このことを皮切りに、いろいろなところに参加するようになりました。「男の料理教室」へ参加し、月に一度の料理と気の合う仲間との飲み会やカラオケなども楽しんでいます。「篠笛同好会」にも入会し、発表会などにも出ています。また、高校時代にブラスバンド部にいたことから、音楽にも興味があり、「君津シニアアンサンブル」にも加わり、フルートを担当しています。

更には、運動もと思い、浪江にいる頃からやっていた「剣道」と「居合道」を始めることとし、木更津市の体育館において稽古をしています。月・水・金・土は、居合道。火・木・土は、剣道。日曜日以外は、稽古に出かけています。その甲斐あってか、平成29年には、「居合道七段」に合格し、令和元年には、「剣道七段」と「居合道教士」に合格しました。これは、私のライフワークとして、続けてきたことで有り、大変喜ばしく、名誉なことであります。

このように、原発事故の避難で、苦しい思いをしましたが、新天地において、地域の方々と親しく触れ合うことができています。今後も、地域の皆さんのお力をお借りしながら生きていきたいと思っています。

浜通り会では、副幹事長との大役を仰せつかっていますので、会の趣旨に則って微力ながら、会の隆盛のために尽くしていきたいと思っています。よろしくお願いします。

東京うつくしま福島浜通り会に入会して

東京うつくしま福島浜通り会　会計
齋藤隆子

甚大な被害をもたらした、東日本大震災の発生から今年で10年目を迎えました。JR常磐線が9年ぶりに全線での運転を開通するなど明るい話題で始まった2020年ですが、今なお4万人の避難者・災害関連死でなくなった方がいるなど厳しい状況が続き、時は流れて復興は進むが、まだまだ苦労している人が多く震災は終わっていないと聞きます。私たちもこれから忘れがちな震災と原発事故を風化させないためにも何が必要か改めて考える時期にきているのではないでしょうか。

さて、私は、道灌山学園初代理事長高橋系吾先生の詩が大好きで座右の銘にしています

◎その一言で励まされ。◎その一言で夢を持ち。○その一言で腹が立ち。

◎その一言でがっかりし。◎その一言で泣かされる。

ほんのわずかな一言か不思議な大きな力を持つ。ほんのちょっとした一言で

普段何気なく使っている言葉ですが、たった一つの言葉でも不思議な力があることを教えてくれる詩です。言葉は周りの人を良くもし悪くもしてしまうからです。

心に響く言葉、人に勇気と希望を与えられるような人間になりたいものです

現在、社交ダンス愛好家と共にダンスの公認講師及びJSTD日本ダンス教師協会理事をしながら健康維持、頭脳活性化が図られる社交ダンスの世界を楽しんでいます。

東京うつくしま福島浜通り会と共に歩んで

東京うつくしま福島浜通り会　監事
菅野はつえ

「東京うつくしま福島浜通り会」誕生30年おめでとうございます。

私か「東京うつくしま福島浜通り会」と出会って20年です。ここは私の原点であります。光陰矢の如しとはよく言ったもので、長い間をこの会と共に歩んできたことになります。その中での本会は、役員会、定期総会、旅行会等の色々な行事をとうして、ふるさとの先輩方から学べる場であり、知的好奇心を満足させる場であり、憩いの場・自分を育てる場でもあり、そしてふるさとでもありました。

これからは「東京うつくしま福島浜通り会」が50周年、100周年と途絶えることなく次世代に受け継がれるように「何」ができるか「何」をしたらいいのかを考えながら仲間と一緒に歩んでいけたらうれしいなあと思っています。

待ちわびて！

東京うつくしま福島浜通り会　幹事
黒田恵美子

令和２年１月１日　夜ノ森の帰還困難区域地区です。でも桜だけは忘れずに咲き乱れるでしょう。今春から常磐線も開通し、つつじの根も残したので楽しみです。道路を挟んで割れた方々の気持ちを思いますと分断された場所に立ち、胸がつまりました。でも春は来るのですね。

旅をしませんか？

東京うつくしま福島浜通り会　幹事
井川憲太郎

私は昨年、四十を前にして、両親を亡くしました。そして、実家には誰もいなくなりました。故郷である喜多方にあるお墓も、近い将来、東京に移動させるつもりです。これで本当に故郷の喜多方とは縁が切れてしまうのかな、そんなことを昨年末に思っていました。

しかし、故郷の風の音や匂い、空の高さをどんなときも忘れることができず、故郷に思いを馳せながら、混雑した地下鉄の中で過ごしています。

そんな故郷の名物、それは喜多方ラーメンです。昔の屋台で売られていたようなオールドスタイルの醤油ラーメン、太く縮れた麺に汁が絡みます。鳴門巻や支那竹もどこか懐かしい。丼に口をつけ、汁を啜り、勢いよく麺を啜れば、そこは雪の絨毯が敷き詰められた野原を駆けて遊んだ少年の日の昼ごはんを思い出します。

思い出は、私の体と脳に鮮明なセピア色の栄養を与えてくれます。それはそれで良い。でも、思い出が単なる記憶になってしまわぬよう、私は今年、旅に出ます、故郷を再発見するための。皆様も、故郷を再発見するために、旅をしませんか？

東日本大震災を振り返って

東京うつくしま福島浜通り会　特別幹事
いわき支部長　**新妻　司**

今思えば、あんな巨大地震がおきた日からもう９年も経つのかと記憶の奥底から思い起こされてきますが、正直思い出したくない出来事でもあります、でもあえて皆さんにも震災当時の出来事を知っていただきたいと思い書き上げる事としました。私は、震災当時、福島県双葉郡楢葉町で下水道施設で施設の運営業務を行っていました。楢葉町は、震度６強と一番揺れが激しい場所の揺れであったので、今までに体験したことのない恐怖、どうしようと思いながらその場から一歩も動けませんでした。地面は、みるみるうちに沈んで行き、地割れ、ガラスが割れ物があちこちで倒れていきました。揺れがおさまり少し気持ちがおちつきを取り戻したので楢葉町役場庁舎へ避難しましたが私が役場へ避難する道路状況は酷い状況でした。地割れ、地盤沈下、民家の倒壊などで避難先へ向う事が中々困難でした。私が着いたころには周辺の住民の方々が大勢いて、家族の事、近所の方々を心配する声、家に戻るといって止められ説得している声で騒めいていました。

私も、家族や会社の仲間の安否が全く分かりませんでしたから、携帯で連絡を取ろうと試みましたが混線していて全くつながりませんでした。その時突然今まで聞いた事のない地響きと揺れがありました。大津波が岸壁にぶつかった時に生じる地響きだったのです。突然の出来事で言葉を失いましたが、とにかく家族のもとへ向かい安否確認をしたかったので、会社の車で通常30～40分の所３時間かけ何とかいわき市四倉町の自宅へ向かいました。周辺の状況は家はなく、瓦礫が散乱し、車はあちこち転がっており無残な状況だと思いました。近所の人達や我が子はどうなったのかと焦りだったり心配で、まさかと恐怖でした。家族や妻、子供達には色んな場所の避難所を手当たり次第探して、やっと夜10時頃に再開する事が出来ました。その時ほど安堵したというか、嬉しかったというか、本当に気が張っていたものが肩からすーと気持ちが楽になりました。それからと言うもの今まで築き上げてきた事、近所の繋がり、楽しかった思い出が一気に無くなりバラバラになりとても悲しかった事を思い出しました。その日から私の人生が大きく変わった事は確かです。色々な場所から原発被災者の子供の虐め、同じ小学校、中学校へ通っていても出入り別々の虐め、子供達には責任はありませんが父兄達が自宅で話している事が子供達の耳に入り知らず知らずの内に入り、子ども同士の差別感が生まれたのだろうと思います。私は、とても悲しい事だと思いましたし悲しかったです。こんな時にこそお互い助け合わないと行けないのにと思うのですが、むなしいです。こう言う事が会った事を知っていただく為、明記しましたがこれが現実なんです。今、福島県では原発事故であらゆる人が他県から原発復興を目指して私を含め色々な人が尽力していますが、中々汚染水問題などが前に進んでいないのが現実なんです。そこに新型コロナ問題が発生しております。こういう時こそ一人一人が助け合い、自分達に何が出来るのかと問い詰め少しずつでも前に進むよう尽力していければと思っています。

最後となりますが、東京うつくしま福島浜通り会「創立30周年」おめでとうございます。私からのお願いとしては厚かましいのですが、これからも今まで以上に県内へ出向いていただき一人一人が何か感じ取っていただければと思います。宜しくお願いいたします。

故郷の今に思う特別

東京うつくしま福島浜通り会　特別幹事
楢葉支部長　**松本公一**

東日本大震災から九年一か月の月日が過ぎました。

私の故郷（立石地区）は小さな二十五世帯の地区です。故郷に帰還した人、又いわき市に住んで通いながら田畑を管理しているに分かれてきたように感じて来ました。

離れている人でも生まれ育った所で先祖代々の土地を受け継いで来たので好きで離れたわけでもなく、やむなく離れて生活しているのです。故郷も時間の経過と共に神仏を敬う心があって、次にその立石神社の拝殿が東日本大震災で大きな被害を受けてしまっていたので貞観18年（876）に立石大明神として祭祀された歴史のある立石神社の拝殿は約百五拾年前の文久2年頃に氏子によって建てられたのです。それが平成31年12月より着工し令和元年五月竣工し、11月には落成記念として（新嘗祭）を実施された事は大変に喜ばしい事でありました。

又、立石不動尊堂は、まだ着手しておらず復興には、まだまだ時間がかかるようであります。松館行政区、旧立石地区の繁栄、檀信徒・氏子各位の安寧を祈念し刻字された復興記念碑が大楽院によって建立された事が歴史に重みを感じ、感謝・感動しております。

浜通りと私のふれあい

東京うつくしま福島浜通り会
さ　く　ら

昭和49年7月さくらと一郎のデュエットでデビュー「昭和枯れすすき」を発売。あっと言う間に46年の月日が流れました。昭和50年の暮　日本有線大賞グランプリを頂き、レコードも150万枚のミリオンヒットになりました。その後、12年間のコンビ生活にピリオドを打ち、お互いに別々の道を歩み、現在に至っております。ソロ歌手になって43年色々な事がありましたは応援頂いた皆様のお陰で今日の私があります。

この世界で生き貫くのはとても大変ですが歌い続けられことに感謝と幸せを噛みしめてお仕事をさせていただいております。昨年デビュー45周年記念アルバムを発売しました。タイトルは「ふるさとえがおさん」です。このタイトルは福島県浜通りの方言が使われております。東京うつくしま福島浜通り会会長の新妻会長をはじめとして会員の皆様に応援を頂いております。私も心から感謝の気持ちを込めて歌わせて頂きます。これからも震災後復興のためにもラジオ番組で流したり、ステージでもっともっと歌い続けて行きたいと思っています。ソロ歌手“さくら”で“ああひとり”という楽曲で頑張っております。この道一筋胸を張って歌い続けて参ります。これからも故郷復興を祈りながら・・・

富岡町のロウソク岩　　2006.4.29　撮影 竹内久美子